ss Story`s ～Another World`s/Cross Greeed`s～

MUGEN　KAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＯＯ　Ｃｒｏｓｓ　Ｓｔｏｒｙ’ｓ　～Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄ’ｓ／Ｃｒｏｓｓ　Ｇｒｅｅｄ’ｓ～

【Ｎコード】
Ｎ９００１Ｘ

【作者名】
ＭＵＧＥＮ　ＫＡＩ

【あらすじ】
　欲望が交わりし地、ミッドチルダ。
ここに、欲望の使徒達が、なにかに呼ばれるように集結した！
ある者は正義のため、ある者は救済のため、ある者は真偽を確かめるために・・・。
ここに、ＯＯＯの異世界戦記が始動する！！
※この小説を読んでいただく前に、「純正なる正義の使徒　異世界・

飛蝗の跳躍」「〝救える手〟を求める欲望　異世界・恐竜の奔走」「悲しき救世主と欲望達　異世界・青年の終わりなき旅の続き」の続編となっているため、この短編群を読んでいただくことをお勧めします。

Next OOO Now Loading ~Come ON! OOO d

この小説は仮面ライダーオーズのIFENDの世界×魔法少女リリカルなのはStrikersのクロスオーバーのFF小説となっています。
基本一定量更新した後には一カ月～二ヶ月に一回の更新となる・・・はず、だよね？自分？
この小説を読んでいただく前に、あらすじ欄で述べてある作品群の続編であるため、それらの購読をしていただくとありがたいです。

Next ＯＯＯ Now Loading ～Come ＯＮ！ ＯＯＯ d

ＯＯＯ　これまでのダイジェスト！

８００年前、欲望により作られしメダルの異形、グリード。

グリードにより作られし、ヤミー。

グリードの核となっているコアメダルを使いし者、オーズ。

人間とグリードによる欲望の戦い・・・それは、オーズの器である火野映司によって終結、映司は後ろ髪を引っ張られる感覚を覚えながらも、グリードらと一緒に、クスクシエの面々から姿をふっつりと消した。

その裏で、ミッドチルダで起こった３つの出来事！

１つ！

一枚のセルメダルから復活したバッタヤミーは、とあるバスジャック事件から始まり、ミッドチルダの悪を、直感のままに懲悪していく！

２つ！

砕かれたはずの紫のメダルから生まれた紫のグリードは、とあるデパートの爆発事故に遭遇、自分の存在理由を探しながら、事故に巻き込まれた１人の少女はじめの多数の人々をグリードの力によって助けた！

３つ！

旅の途中、鴻上からミッドチルダの存在、そしてそこにある都市伝説を聞き、その真偽を確かめるため、火野映司ら一行、伊達明がミッドチルダに降り立った！

バッタヤミー、紫グリード、火野映司はじめグリード一行、伊達明、
そして機動六課。
異世界での交わりは、新たなる物語へと！！

　　Ｎｅｘｔ　Ｃｏｍｉｎｇ　ＯＯＯ！！　Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｂｅ　ＨＥＲＯ？

Count The Story's 1　異変と出現と始動　#1

この日、19歳のうら若き女性が、広い部屋で1人頭を悩ませている。
ここはミッドチルダの中心地から少し離れた、機動六課の隊舎。
さらに言うならば、この女性、八神はやてが1人頭を痛ませている場所は、部隊のトップが居座る機動六課部隊長室、言いたいことをまとめるならば、この妙に広い空間、映像に目をやりながら眉間にしわを寄せているこの人物、八神はやてが、ここ機動六課のトップに立つ人物であることを言いたい。

機動六課・・・約一カ月前に起こった、次元史に残る大規模な事件、J・S事件。
この事件の解決に大きな一役を買い、文字通り多大な活躍をし、ミッドチルダに大きく名売れた存在、それが、ここ古代遺物管理部の六課・・・機動六課である
ここの隊舎、実を言うならば、少し前まではただの瓦礫群であった。要因としては、もちろんそのJ・S事件における被害で、J・S事件の爪跡でもあった。
しかし、名が売れ、管理局本部も機動六課の働きに評価を示したためか、この部隊舎の修復が町の復興よりも優先されてしまい、こうして一カ月という短期間で元通りとなってしまっている現実がある。
働きに評価していくれていることはありがたいが、町の復興より優先されていることを聞いたときは、大いに八神はやて他隊長陣一行が文句を言っていた、という閑話もある。
ともかく、この完璧なまでに修復された部隊舎の部隊長室で、はやては先ほどから大いに頭を悩ませていた。

Ｊ・Ｓ事件、という大仕事が片付き、それの多大な事後処理も、だんだんと落ち着いてきたこの時期、本来ならばここまで苦悩することはないのであろう。
がしかし、彼女をはじめとした管理局の仕事は、あくまで「次元世界の平和と秩序を守ること」。
こういった仕事に関しては、平穏など約束されていないものである。
実際問題として、ここ最近、特に2週間前から、ミッドチルダで異変が起きている実情があるのだから。
異変・・・それは、ミッドチルダで広まっている、とある都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によって、無条件の救いの手を差し伸べる。」

ミッドチルダに突如現れた謎の異形、魔法生物の類でもなければ、魔法で変身した人間でもない。
まさに未確認、アンノウンが2週間前に出演したのだ。
これを聞いた人ならば、大体多数の人は「ただの都市伝説」だとあしらうであろう。
だが、実際に目撃した人が多数おり、映像にも残されているのが現実であり、存在が証明されつつあるのが今の現状。
そう断言できる要因・・・それは、機動六課のＦＷ（フォワード）メンバーそれぞれが、その特徴にぴったりな異形と出会っているのだ。

まず緑の化け物・・・これは、ライトニング分隊のエリオとキャロが出会っている。
休暇、とある娯楽施設へと出発していた2人に、突如バスジャック

の魔の手が迫り、目的であるキャロの誘拐遂行の寸前に、その異形が介入、その一味を退治した後に、異形はどこかへと逃げて行ったらしい。
その後、ミッドチルダの都市部を中心として、泥棒から始まり大規模な強盗まで、その異形が介入、解決していっている。
これを聞いて、誰かが思うであろうか・・・まるで「正義の味方」みたいだと。
実際、遭遇したエリオとキャロも「まるでキャロを助けに来たようであった」と発言しており、実を言うならば、その異形のとある口癖が確認されてあるのだ。

「悪い奴は・・・許さない。」

その行動、その言動、まさに地球のアニメや漫画でよく見る「ヒーロー」。
映像で確認されてある姿だけでは想像できないのだが、そういった実情がある以上、まさに「正義の味方」といっても過言ではないのか？とはやては疑問を抱いている。

もう一方、骸の異形・・・これは、スターズ分隊のスバル、ティアナ、プラスとしてスターズ分隊の隊長である高町なのはが保護している子供、ヴィヴィオが遭遇している。
こちらも、同日の休暇、とある新興企業のデパートにやってきた3人が、そのデパートの爆発事故に巻き込まれた時、その異形が介入、ヴィヴィオを2人の元に送り返し、それにとどまらず、大規模な氷結魔法によってデパートの火事を鎮火、多数の人々を救出した後に、管理局の到着を確認した刹那、その場を去って行ったらしい。
とはいったものの、実を言うならば、その異形が行った広範囲の氷結作業、魔法を使った、ということの確証がなく、謎の力によってのもの、と予想されている。

しかし、その規模、氷結の時間を考えるならば、魔力に換算する場合、少なくともＡＡＡ、下手をすればＳオーバーはくだらないだろう、と予想されている。
その後、ミッドの郊外を中心として、事故や事件から人を守っている異形の姿が確認されている。
こちらは、正義の味方、というよりは、一般的に言われる救助隊員の働きに近い。
実際、事故や事件の現場から救出された人々、そしてスバル、ティアナ、ヴィヴィオは口をそろえて「ほんとに他の人のことを心配してそうで、声だけは、優しそうな男のものであった」と発言している。

この２人の異形によって、ここ最近の事故、事件による死亡者や負傷者が激減、犯罪者の検挙率が大幅アップ、管理局の仕事が大幅に激減している。
つまり、管理局の大多数の局員によって行っている仕事以上の仕事を、その異形２人だけで行っている現実があるのだ。
聞くだけでは大助かり、という印象を受けるであろう。
だが、その２人は異形、いくら善業を行っていても、こちらはその存在に対し、調査し、警戒しなければならない現実がある。
正直、異形によって助けられた人の発言を聞いているせいか、どうもその異形には悪いことをしている、という少々の罪悪感が拭えない。
だが、その異形の正体が、どこかの研究所が作った生体兵器などであったら、ミッド全体が危険にさらされる可能性がある以上、そして、管理局としての仕事である以上、はやては隊を統括するものとして、非情に、毅然であるべきなのだ。
一旦異形に関してのデータ資料を見た後に、はやては新しい２つの画面を展開した。

まず、今日の異形の活動状況に関してのMAP。
異形が力を発揮したり、出現した場合には、その地点に詳細不明のエネルギー反応が感知されることを利用したものだ。
おかげで、あるい程度異形の活動状況、発生状況をつかむことはできたのだが、その地点に足を運んだ時には、とっくに異形の姿は無く、あるのは事件の犯人であったり事故の現場から救出された人であったりする。
今日も、ひったくり犯の２人が、足を凍らされて拘束されていることが起こり、現在、その２人から異形についての情報を聞き出している最中だ。
もうひとつは、その異形についてのもっとも身近な情報源の写真だ。
３日前、異形の現れた現場に落ちていた、一枚の銀のメダル。
分析の結果、魔力でも科学的なものでもない謎のエネルギーの圧縮されたもの、という結果が出ており、現在メダルのさらなる分析を行っている。

「はぁ・・・、まだまだやることは山積みや・・・。」

少々元気のない、はやてのため息交じりのつぶやきが、広い部隊長室に少しばかり響いた。

同時刻、今の時間は一般的に言われるランチ、昼食の時間だ。
機動六課の食堂も、時間に反映して一層と人が多い様子で、たび重なるデスクワークに疲れを表した顔をしている者や、今日のランチはなににしようかと小難しそうな顔をする者など、十人十色の赴きだ。
その中に、これまたハードな実技訓練を終わらせ、いかにもな様子でやってきた４人、紛れもなく、ＦＷメンバーの４人、スターズ分隊のスバルとティアナ、ライトニング分隊のエリオとキャロだ。

この４人、特にスバルとエリオは、機動六課で一番の大喰らいで有名で、この２人にかかれば１０人前の料理がいともたやすくなくなってしまう。

今日も、こぼれそうな大皿に盛られた人外な量のミートスパゲッティを持ち、４人はもはや指定席となったいつもの場所の、いつもの席順で座り、おもむろに食事を始める。

言葉だけ聞けば、これがいつもの光景なのだろう、と予測できるであろうが、ここ最近での変化が生じている。

それは、この４人プラスこの４人のそばに座り、オムライスをほおばっているヴィヴィオの中にある気持ちだ。

まず、エリオとキャロ、キャロの心の中では、ある後悔の念が渦巻いていた。

それは、「あの異形に、助けてくれてありがとうと言えず、目の前で怖がってしまった」ということ。

キャロはとても純真で、何よりも優しい心の持ち主だ。

キャロの得意とする支援魔法は、その性格が具現化されたのごとく、ＦＷメンバーに温かい守りと力を与えてくれており、その性格が竜の使役につながっているのかもしれない。

そんな心の持ち主である彼女にとっては、そのことにとても後悔しているのだ。

自分が怖い大人たちに連れ去られようとしたとき、颯爽と現れた緑の異形、その異形は彼女を魔の手から守り抜き、バスにいるエリオまで丁寧に運んでくれた。

だが、それに相反し、先ほどまで置かれていた状況も相まってしまったためか、キャロはその姿、その力に、心の底から恐怖の念を覚えてしまったのだ。

助けてくれた恩人に対しての気持ちではないことは重々に承知、だからこそ今まで後悔し続けている今がある。

エリオも同じようなもので、自分が守れなかったキャロを、傷一つ

つけずに運んできてくれた相手に対し、槍型デバイスのストラーダを向け、完全に敵意を表してしまった自分に、あの行動は本当に正しかったのだろうか、自分にはほかにやるべきこと・・・感謝することがなぜできなかったのだ、と自問の螺旋状態となっているのが現状。

炎が迫り、瓦礫が落ちてきた状況で、体を張って助けてもらったヴィヴィオも、キャロとの心境が似ているであろうか。
彼女も、幼子らしい純粋さと優しさを持ち、なにより人の温かさを知っている人物。
あの骸の異形は、自分をまるでパパのごとく心配してくれて、さらにはあのデパートの人々全員すら助けてくれた。
しかし、あの異形が優しき異形だと分かったはずなのに、自分はその姿に悲鳴を上げそうになり、助けを請おうとすら思ってしまったのだ。
あのように、自分は数々の人々に助けられてきた、だからこそ、感謝の大切さも重々に知っている。
だが、あの異形にだけは、自分は感謝を伝えられず、拒絶の意を少しでもあらわにしてしまった。
姿が違うだけで判断するなど、自分の中では持っての他、だが、あの時、自分は外見の恐怖だけを感じ取り、視野を狭めてしまったことに、後悔が渦巻く一方なヴィヴィオであった。
スバルとティアナ、特にティアナに関しては、あの異形の力へと畏怖と、あの異形への疑問、あの時の異形の様子から感じる優しさを信じたい気持ちが混沌を形成している。
年長者であるために、自分達は冷静に状況を見なければいけない、それはあの異形にも同じだ。
しかし、あの異形の人間臭いしぐさ、言動、人間以上の人の安否への執着を見ていると、そんな疑念など吹き飛んでしまいそうだ。
しかし、あの６階建てのデパートを、一瞬にして凍らせてしまった

力、普通の魔導師以上の速度を持つ飛行能力、目撃証言から推測した怪力、それを考えると、どうしても異形としての畏怖、疑念が払えないのが現状、平和と秩序を守る管理局員としての判断であろうとティアナは考える。

スバルに言ったっては、ティアナと同じ思考をしていながらも、どちらかと言えば異形に対して一定に信頼を持っている心境だ。

管理局員より速く現場に赴き、人をいち早く助ける様は、自分の理想としているスタイルに準ずるもの、話によれば、一般的な魔力を持つ管理局員が行けないような場所に、必死に行こうとし、人を助けてたい一心でいる骸の異形や、事後処理に追われ、ガサ入れをできずに放置気味となっている犯罪組織の本部に、単独で突撃し、組織を壊滅させた緑の異形が確認されており、その雄姿は、スバルが考える管理局員のあるべき姿の鑑であるからだ。

若いがために迷うのは若い者の特権、それは、それだけ迷う時間を持てるところにあるからだ。

その食堂、４人のような気持ちを抱いている者はこの４人だけではない。

４人の少し離れた場所で、ゆっくりなペースでチャーハンを食べているヴィータ、その横でその体にとってはかなり大きいパンを、その小さな口でほおばっているリインフォース？も異形に遭遇したことがあるのだ。

質量兵器の取引が行われている、と通報を受けたのは４日前。

詳しい内容は、ミッドのとある港で、大量の質量兵器の取引が行われそうだ、ととあるフリーの記者が通報し、それを詳しく調べようと、その取引日に、ヴィータ、リインフォース、シグナム、ザフィーラといったヴォルケンリッターの前線メンバーが張り込みを決行した。

その夜、その情報が皮肉にも大ビンゴ、実際に、船に積まれた質量兵器らしき木箱を運搬している集団を見つけ、機を見計らったところで、４人による取り押さえを行った。

もちろんだ、といっているがごとく、その集団はデバイスと、質量兵器である拳銃やマシンガンを武装し、４人に対抗した。

犯人の一味は５０人前後、最初は２０人前後かと見られた戦力であったが、一味は万が一のことも考え、用心棒集団を忍ばせてあったのだ。

用心棒、と言っているからには、それなりの実力があり、炎の変換資質を持つものや、魔力弾に長けているもの、剣に長けているもの、アームドデバイスを持つ格闘に長けているものなど、一者一葉な戦力であり、それないな実力、魔導師が苦手とする質量兵器を行使されたせいか、４人は苦戦を強いられた。

そして、その事態は、不足に起こってしまった。

仲間の１人であるリインが、不意を突かれユニゾンされる前に人質として拘束されてしまったのである。

リインは、魔力はそれなりにあるものの、どちらかと言えば支援を得意とする融合騎、それゆえに不意を突かれれば拘束など簡単であった。

事前にユニゾンを行っていれば・・・とヴィータ一行は後悔しながらも、人質の存在によって攻撃ができず、防戦一方の不利な展開。

増援を頼む方法はないか、と３人が思考していた、その刹那であった。

リインがバインドによって拘束され、一味のリーダー格の存在が拳銃を向ける中、不意に、拳銃を持つ手めがけて緑の電撃が走り、その電撃は拳銃を高熱によって破壊、その後たじろいでいる犯人をよそに、刹那、リインに施されているバインドが破壊され、音速のごとく紫の影がリインを助け出したのである。

いきなりの襲撃に、一味は「管理局か！」と動揺するが、それらの行動を起こした犯人の姿を見た瞬間、一味と、それらと交戦してい

たヴィータ一行、助けられたリインは戦慄した。
一体は、緑の装いを持ち、人型に緑の皮膚を植え付けたような姿、その姿は、ヴィータが地球で見たバッタに似たものがあった。
もう一体は、頭は化石の骸、超速飛行によってリインを助けた名残か、背中には大きく広げたしなやかな紫の翼、その装いはまさにバフォメットの異形。
裏社会で一気に広まり、恐怖を知らしめた都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によって、無条件の救いの手を差し伸べる。」

その都市伝説に伝えられている特徴にぴったりとあてはまるその姿、現場にいるもの達は理解する、そうか、これが都市伝説の存在だ、と。

「あの~、この子の味方って誰ですか？」

「・・・私達だ。」

そう返事したのはシグナム、といっても、友好関係を築こう、という雰囲気はなく、他の２人も臨戦態勢をその異形２人に向けている。
一色即発、その異形の姿をみたものは、その行動には納得できるであろう。
だがしかし、外面だけで判断したことを、現場の人たちは知ることとなるのだ。

「この子、腕に怪我をしてるんで、治療してやってください。でも、無事でよかったです。」

「お前たちは逃げろ。ここは俺達に任せてくれ。」

「・・・はぁ？」

要約するならば、また誰かが怪我をする前に、ここから安全な場所まで言ってくれ、ということだ。
怪我を心配そうに見ている骸の異形、こいつらは任せてくれ、とためらいなく胸を張った緑の異形、その姿からは想像できない自分たちへの配慮に戸惑いを見せるヴィータ一行、しかし、判断の時間はないらしく、一味はその異形に一斉攻撃を仕掛けようとしている。
それに気がついた緑の異形は、リインを丁寧そうに持ち、その自慢の跳躍力でヴィータ一行に接近、警戒を続けている一行をよそに、任せた、と一言残しヴィータにリインを預け、また跳躍によって一味の布陣に突撃した。
その様に恐怖を覚えたためか、はたまた焦りか、一味は一斉に異形2人に攻撃を始めた。
・・・が、その対立は圧倒的であった。
飛び交う魔力弾、斬撃、炎、それに戸惑いや臆病を感じさせず、むしろ余裕すら感じさせる様子で、異形達は攻撃を跳ね除け、一味をなぎ倒していく。
ヴィータ一行がなにより驚いたのは、異形に質量兵器が効かないことであった。
奥の手として使用したマシンガンや拳銃、しかし、異形は被弾をしても動きを少々止めるだけで、まったくダメージとなっていない様子であったのだ。
緑の異形はその脚力と跳躍力を駆使し、格闘を主として一味を倒していく。

骸の異形は氷結の息と飛行能力によって、飛行によって攻撃をかわしつつ、氷結によって生成した氷の弾丸や、紫のエネルギー弾を一味に飛ばし、倒していく。
その様はまさに地球の時代劇のごとくばったばったと行われ、気がつけば5分足らずで一味は全滅していた。
しかし、ヴィータ一行の仕事はまだ終わっていなかった。

「そこの2人！助けてくれたことには感謝する。しかし、あなた達には少々聞きたいことがある。・・・任意同行、で済ましたいのだが。」

とシグナムはデバイスを一旦下げ、こちらに交戦の意思はない、といった意思表示を行う。
といっても、デバイスを下げたのはシグナムだけで、万が一、ということでヴィータとザフィーラは臨戦態勢でいるが。
だが、異形の返事は早かった。

「あー・・・そのー・・・ごめんなさい！」

「すまぬ。」

と異形2人が頭を下げると、骸の異形は翼を一気に広げ、周辺に強風を発生させる。
それで少しばかりシグナム一行がたじろいだ瞬間、異形の行動は早かった。
骸の異形が緑の異形を抱え、目にも止まらぬ速度で空へと飛び上がり、遠くへとその闇に姿を消してしまっていた。
その行動は一瞬、その様に、改めて異形の力を感じたヴィータ一行は、様々な疑問を持ちつつ帰還するのみであった。

その日の緊急会議、もちろん内容は密輸事件と異形の出現について。
そして、ヴィータ一行から聞いた異形の特徴から、異形の識別コードネームが決定されたのである。

緑の異形・・・「未確認１号(アンノウン)　Ｇｒｅｅｎ(グリーン)・Ｈｏｐｐｅｒ(・ホッパー)」

骸の異形・・・「未確認２号(アンノウン)　Ｐｕｒｐｌｅ(パープル)・Ｓｋｕｌｌ(・スカル)」

それらの決定は、機動六課が本格的に未確認についての調査を行うことを証明するものでもあった。

Ｃｏｕｎｔ　Ｔｈｅ　Ｓｔｏｒｙ’ｓ　１　異変と出現と始動　＃２（前書き

結論

バッタ＆ａｍｐ；紫マジヒーロー

Count The Story's 1 異変と出現と始動 #2

日の光が輝き、人の心をなにかに誘うような今日の日。
そんな日にはどこかにぎやかさを感じるもの、特にミッドチルダの都市部のような人の交通が多い場所であったらなおさらだ。
しかし、太陽とは相反に、まったくの人の気配を感じさせない一帯、ビルは形をとどめているだけのモニュメントと化し、まさに「捨てられた街」。
ここはミッドの北部に存在する、通称「廃棄都市」、正式名称「廃棄都市区画」。
この時期を考えると5年近くとなるであろうか、臨海第8空港で起きた大規模火災、ロストロギア「レリック」の存在が原因となり、すべての始まりの一端であった事故。
その事件によって問答無用に空港は閉鎖に追い込まれ、その近隣は余波によって廃棄された。
ここは、その際に廃棄された一角、いわば事故の爪跡であり、改めてロストロギアの危険性が再確認された証明でもある場所なのだ。
廃棄、という言葉は皮肉にも適切で、かすかに下水道機能が生きているだけの、ただの抜け殻。
人の出入りなどあるはずもなく、あるのは風の吹き抜ける音とその合間に強調される沈黙の一種である。

・・・だが、とある廃棄ビルの屋上に耳をよく傾け、澄ましてみると、不意と拳や蹴りが空を切り裂く音が聞こえるのだ。
声は無く、ただただ拳、足が空間を射抜き、時折にボディに強く打ちつけられる音も見受けられる。
音とテンポから予測して、おそらく格闘の練習などでもしているのであろうか、音の強さと刻みから、よほどの力と技量を見受けられる。

実力者ならば一目見てみたい、とバトルマニアの人物なら考えるであろうが・・・その音の正体、音を発している犯人の姿を見た瞬間、大部分の人物らは戦慄するであろう。
拳と蹴りを繰り返している人物、否、異形、その姿は骸を象るバフォメット。
もう一方の異形、その拳と蹴りを受け身している姿、緑を基調とし、バッタを象る人型のなにか。
その姿は、緑の異形が、骸の異形に格闘を教えている最中なのだ。
骸の異形がかなりの圧のかかった格闘の動作を繰り出すも、緑の異形はその跳躍力と脚力、基本的な筋力を駆使したフットワークで回避を繰り返していく。
時に緑の異形のボディに拳や蹴りが撃ちつけられる時がありながらも、基本的には大きいダメージはなく、これぐらいのものなら慣れている、といった様子だ。
その時間、一時悠久なものかと感じることもあったが、終わりの時は必ずやってくるものである。
お互いに距離を取りあい、これまたお互いに大きく一礼、これらが終わりの合図なのであろう。
異形らはお互いに向き合い、静かに傾き合うと、2人は外の景色に視線を預けながら、おもむろに今の状況、および進歩の度合について語り合った。

「この短期間でかなり進歩してきたな。」

「いやいや、やっぱり格闘に関してはあなたには・・・。」

「それはお互いの特性の違いがあるからだ。君には私よりも大きな力を持っている、すぐに私を追いぬくさ。」

そうして、緑の異形は静かにサムズアップ、骸の異形もそれに返し

た。
この2人の異形が邂逅したのは、1週間前、お互いにこの世界で生を受けてから1週間が経過した節目の時のことであった。
ミッドの郊外、そこにあるとある研究機関の発掘現場で、岩盤沈下による生き埋め事故が起こったのだ。
生き埋めにあったものは12人、幸い死亡者はでなかったものの、そのまま1時間経過したならば12人全員窒息によって死亡する状況、さらに地形上唯の地上からの出入り口も余波によって塞がり、管理局の救援にも時間がかかる、まさに頭を悩ませる状況に置かれた、その時であった。
自慢の跳躍力によって地形をもろともせず、緑の異形がその助けを実行すべくやってきたのだ。
偶然近くにいたところに聞こえた轟音、それを聞いたとき、自分のなかにうごめいている正義の理念が、刹那の時も待たずに体を動かしていた。
この場所にやってきたからには、自分は人を助けるべきだ、と早速と生き埋めの人々を助けようと行動に移す・・・ところなのだが、異形は状況を冷静に分析していた。
この状況で考えられるプランは、自分の雷撃によって岩石群を粉砕すること、だが、少しの刺激で岩盤が再び沈下する、または決壊するのではないだろうか、という可能性が考えられたのだ。
しかし、自分は格闘に自身は少々持っているが、岩石群を粉砕するほどの脚力は無い、故に八方ふさがり、もはや手詰まりかと思われた、その時であった。
不意と、太陽光を一瞬にさえぎる空の影、大きな翼をはためかせ、かなりの速度でこちらに向かってきている。
その影は、背中に光を浴びながら、対照的に地面に接近してきたときはゆっくりと、その翼を動かし、まわりに心地よいぐらいの風圧

を発生させ、その影はこの地に降り立った。
頭は骸を象り、背中にはしなやかな翼、体に見受けられる異形の様は合成獣、紫を基調とした様、そう、ミッドの裏で広まっているもう一つの都市伝説の存在、骸の異形だ。
お互いに近くにいたために、気配を感じた異形2人はその気配に目を配る、その時、お互いに強く感じたのだ、自分と同じような存在、同族に近いものだ、と。
人間から見ればとても人懐っこい性格をしている骸の異形は、その姿にまったく尻込みせず、初めまして、と軽く一礼。
それを見た緑の異形は、相手に戦いの意思はない、と悟ると、無言で軽く一礼を返す。
その刹那、お互いにこの場所にいる理由、お互いがなにを成すためにここにいるかを感じ、緑の異形が提案した。
それは、自分の雷撃で岩盤を壊したいのだが、決壊の可能性がゆがめないので、なには解決策はないか、という質問に近いもの、骸の異形はその問いに頭を捻り、少々のシンキングタイムを取った後に、異形は思いついた。
善は急げ、と骸の異形は提案を述べる、それは、自分が周りの岩盤を、自分の氷結の力によって固めて、できるだけ決壊は防ぐから、その間に岩盤を破壊してほしい、というもの。
緑の異形はその提案に文句は無く、納得の意を表すように大きくうなずくと、骸の異形も大きくうなずき返す。
お互いにこの日が初対面、どれだけの力量があるかもわからない、だが、自分達が同族だ、と直感で感じたときから、お互いに一定の信頼を置いたのかもしれない。
決断からの行動は早く、すぐさま骸の異形は力を解放、大きな咆哮を上げると、まわり一帯が氷の世界と化した。
その様になるまでは一瞬、その力量に、やはり間違ってはいなかった、と緑の異形が心で納得、その後、時間を置くことなく緑の異形は生き埋めの要因となっている岩盤を雷撃と骸の異形によるエネル

ギー弾によって破壊、その空間の先から12人の人達を視認した。

その後、緑の異形はその跳躍力で、骸の異形はその翼による安定した飛行によって、12人達を無事な場所まで送り届けると、一端、2人はその場から離れ、お互いに顔合わせを行った。

お互い、自分の直感、自分の中にある「欲望」によって動いている、いわば人助けを行っていること、自分はなんでこの世界に生きているのかが分からないこと、お互い今までなにをしてきたのか。

その話をしていく後に、お互いに同じような理念で動いていることに親近感を覚え、骸の異形が一緒に行動することを提案したのだ。

その提案には、緑の異形も賛成の意を露わにしていた。

緑の異形は、ここ最近自分の力に及ぶ限界を感じており、このままでは完全なる理念の遂行ができない、と危機感を覚えていた最中、実際に今回の件においても、おそらく骸の異形の協力がなければ遂行できなかったであろうから。

それを考えた緑の異形は、快く協力を容認、その瞬間から、ミッドチルダの都市伝説コンビが結成されたのだ。

なぜ緑の異形が格闘を教えていたかというと、共闘していくうちに、骸の異形が自分の格闘経験の無さに気づき、緑の異形にノウハウを軽く教えても立ったのがきっかけ。

その後、興味があるならば自分が教えられる範囲で教授しよう、という緑の異形の心遣いによって、廃棄都市に根城を置き、こうして毎日のように拳を打ちあっているのだ。

風が静かに吹き抜け、それに緑の異形はやすらぎをかすかに感じている、その時であった。

2人の聴覚、そして、自分の中にある感覚、人の感情、欲望の抑揚を感じ取ることのできる感覚が、不意と感情の高ぶりと欲望の増幅

を感じたのだ。
このパターンは覚えがある、おそらく、都市部のどこかで何かの事件が起こっている、感情の高ぶりと欲望の増幅は、その犯人のものである、と悟る。
異形らの決断は早く、お互いに大きくうなずき合い、これからの行動をお互いに認識する。
自分の中にある理念、唯にある欲望のために、異形2人は、緑の異形はビルとビルとの間を跳躍によって移動し、骸の異形は翼を大きく開き空を翔ける。
こうして、また1つの正義が為されていく、それがここミッドチルダの日々となりつつあるのだ。

＊＊＊

ミッドチルダの科学は、地球とは違う方向性ながあらも、一歩先をいったものである。
発達した通信技術もその例で、地球ではカメラとカメラを通したテレビ電話、というものが存在するが、ミッドの通信端末、地球で言う携帯電話は、もはや画面を通して顔を合わす通信など当たり前で、地球以上にマルチタスクな面も見受けられる。
もちろん、純粋な地球人である火野映司と伊達明は、そんな高性能な科学に触れるのは初めてであり、鴻上から端末を渡された時は関心の声を上げていた。
そして今、その性能が発揮されるときで、火野と伊達、そして火野に憑依しているグリード一行は、地球にいるとある人物と連絡を取り合っていた。
比較的スレンダーな体型、トレードマークのごとく定着してしまった黒い服と、左腕に指定席を置いている小ぶりな人形、通称「キヨちゃん」が画面に視線を向けており、それと比例するかのように、その人物もキヨちゃんに対し常に外さない視線を送っている。

画面を介して話すのであれば画面に視線を向ければいいのでは？と一般人は思うであろうが、これが彼、真木清人のスタイルであり、一番の特徴でもあり、正直、ネックでもある。

『どうでしょうか？グリード達、なにより、火野映司君自身の様子は。』

「こっちは基本変わりませんね。みんないい子ですよ。」

火野が定期的に連絡を取り合っていた唯の人物が真木で、それはお互いに体の状況を確認するためのものでもあり、居候の様子を確認する行動でもある。
彼、真木清人も紫のメダル保持者であり、常にグリード化の危険を背負っている、火野と同等の立場にいる唯の人物、また火野以上にデータ的な面でグリードについて詳しい人物でもある。

『グリード達はまだしも、一番危険なのはあなた自身ですよ、火野映司君。私が3枚保持しているのに対し、あなたは7枚、グリードの意思が宿ったコアメダル1、2枚でも抜ければすぐにグリードとなってしまうのですから。』

火野映司は、体内にコアメダルを持ちながらも、人間として居続けられている特殊な存在である。
大きな要因として、彼自身が欲望によってグリード化を抑えつけていることと、憑依しているグリード達がそれに加勢している。
グリードとは、本来欲望の暴走を満たすためにしか動けないものなのであるが、紫のメダルの特性である「無」によってその欲望が緩和され、そのメダルの副作用を抑えるためにグリードが憑依している、いわば火野とグリードの関係は、「持ちつ持たれつ」といった表現が適切なのだ。

しかし、グリード化という力を無理やり押さえつけているのが現状、引っ張り続けたゴムがその分力を発生させるように、負担をかけ続けたグリード化の波は、一旦解放されてしまったら、その抑え続けた時間分、一気に進行してしまうのだ。
真木が心配しているのはそれで、小さなきっかけ、一定の紫のコアメダルの力を使ってしまった場合もそれとなるので、火野は力をセーブしているの。
例として、ひったくり犯を拘束するときに、本来、メズールの水流がなくても、空気中の水分から氷結させることができる、しかしそれはメダルの力を行使してでの行動、力をむやみに使用した場合の危険を考え、映司はメズールの水流を使い、それに便乗するように軽い行使を行った。
そういった判断をしていくしかないほど、火野のグリード化の危険性が跳ねあがっており、真木は危険視しているのだ。
少しの談話を行った後、話は真木側の居候の話へと移った。

「そういえば、チェト君の様子はどうですか？」

『彼は相変わらずです。この前は研究室を半分荒らされて少々困りましたが・・・、話しますか？』

「はい、お願いします。」

火野が笑顔で返事をすると、真木は静かに目をつぶる。
その刹那、真木の左手が、一瞬にして異形の者へと変化したのだ。
赤を基調として、どちらかと言えば美しい、というよりふてぶてしい印象を受けるそれは、アンクの右手の写し身、それもそのはず、その正体はアンクの他のタカメダルに宿った、もう一人のアンクの人格なのであるから。

『映司だ、久しぶり。』

「うん、久しぶり。ほら、アンクもなんか言ったらどうだよ。」

「どうもまだ慣れないんだよ。俺の左手が勝手に話すのは。」

『アンクも、どう?元気だった?』

「・・・ふん。まっ、久しぶりにアイスを食べれたから機嫌はいいがなぁ。」

８００年前と現在、とあるきっかけで生まれたアンクのもう一つの人格、他のグリードがいなく、真木のグリード化を抑える人員を探した結果、そのもう一人のアンクに一任したのだ。
真木は3枚のメダルという、火野よりは比較的少ない負担で済むため、もう一人のアンク、チェト1人に任せ、ひとまず成功した、その後、博識で、知識量豊富な真木に感化され、アンク以上に賢くなっているのはここだけの話である。

しかし、右手だけの異形と、左手だけの異形が話す光景はなんともシュールで、伊達は「なんとも面白いねぇ」と言いながらセルメダルの整理をしていた。
話はまた移り変わり、これからの予定について真木と火野は話していた。
地球での仕事に踏ん切りをつけ、ある程度の準備を済ました後に、ここミッドチルダに真木は住居を置くらしい。

『僕自身、科学者としてそちらの技術には興味がありますからね。それに、君の体の検査や、バースの調整も行わなければいけないですし・・・。』

「お待ちしてます。チェト君も、また今度会おうな。その時はいっぱい遊んでやるから。」

『うん！楽しみにしてるよ、みんな。カザリも、またチェスをしようよ。』

「今度は負けないよ。こっちだって意地があるからね。」

再会の契りを軽く交わし、映司は通信を遮断した。

こうして、悪と正義が動く裏で、一時の平穏を噛みしめるものもいる。
青年が守った平和、人、そして異形であるグリード。
「自分のやったことは、やっぱり間違ってなかった・・・。」
こうして、楽しそうなグリードの姿を見ていると、映司は心の底から自分の為したことへ誇りを持てるのだ。

・・・しかし、平穏も、永遠という言葉はない。
おもむろに昼食を食し、こちらの食文化に理解を深めていた火野と伊達、早速食後のアイスを要求してきたアンク他のグリード一行に、ゴリラカンドロイドの鳴き声が聞こえた。
このカンドロイドが知らせるのは、グリードやヤミーの出現・・・この世界での初仕事の報せであった。

火野映司の行動は早かった。
早速としてその出現場所へと全力疾走、伊達はその背中を見届けて行った。
なぜ、バース装着者である伊達明が現場に行かないかと言うと、それはドクター真木からのとある助言に関係あった。

「そちらの世界では銃火器といった質量兵器、というものを嫌悪しており、法律でもこの世界に入れることとさえ禁止されています。それにはそちらの歴史に関係してくるのですが・・・そこは自分で調べてみるといいでしょう。」

「話を続けます。そういうこともあってか、普通の質量兵器以上の危険性を持っているＢＩＲＴＨシステムの存在が管理局にばれてしまいますと、とても面倒なのですよ。火野映司君のグリードの力は、その世界ではまだ一種の魔法である、とごまかすことはできるのですが、バースに関しましては見られた時点でアウト。ですから・・・バースを使うのはあくまで、それを使うしか打破できない状況下の時のみ、としてください。」

だが、火野映司がいたら大体の問題は解決できるでしょう、と追加の一言。
バースシステムが使えない、となったら、伊達は一介の人間でしかない。
彼もさまざまな修羅場を体験してきた身だが、魔法が使えるこの世界の人間と比べれば、ただの一般人と変わりないのだ。

ミッドの商店街、というよりかは料理店が並んだ一種のグルメ通り、と言ったらいいのだろうか。
野菜を中心としたブイオンスープの香りから、思いっきりスパイスが効いている香りまで、その食欲をそそる匂いの様は一様に違いがあり、それぞれの個性、それぞれのこだわりが窺い知れる。
そんな活気がにじみ出ている通りを全力疾走で走っている青年、火野映司も、約1年間多国籍料理の店にお世話になった、及びそこで働いていたためか、その匂いが鼻に着くたびに、「この匂いはあの料理かな？」とか「この匂いはなんだろうか？」などの思いや疑問、思い出が時として蘇る。

彼、火野映司は、コアメダル関連の出来事に巻き込まれる前は一介のしがない旅人であったため、旅先の料理には触れる機会が多々あり、それと関連してくる各々の思い出がある。
しかし、一番印象深かったのは、居候先であり勤め先でもあった多国籍料理店「クスクシエ」の店主、知世子が、昼食の提供、いわばまかないで出してくれた料理であるような気がする。
理由として思い当たる節はある、旅先では、どうも火野自身、人と深いかかわりを持つことを避けていた傾向があったと、火野は感じていたのだ。
かといって、火野は内向的でコミュニティを作れないような性格ではなく、むしろその性格と人間性、なにより嘘はまったくとしてつかない正直さもあるため、人とのかかわりなどいくらでも作れるはずなのだが、そこまでの深い人脈はなかった。
自分でもわからないが、火野は客観的に振り返ると、もしかすると人との関わりを作ることで、「その人と別れる悲しみを怖がっていたのでは？」と本人談。
旅人との出会いは一期一会、出会いの先には、自然の摂理として別れが待っている。
もちろん、旅人である火野は、出会いと別れに人並み以上に慣れて

いるはず、「別れ」に恐怖を抱くことなど、同業者からみればおかしいと思うかもしれない、だが、火野が言っている「別れ」とは、お互いにこやかな笑顔で手を振りあう別れではなく、おそらく「何かの不測の事態により、目の前で死なれてしまうこと」だと思われる。

高校生時代からの彼の夢、それは「世界中の子供たちが笑っていられる世界」。

言葉だけでも、なんとも純真で、眩しく、理想的で、難しいことか、誰もが知っているであろう。

そんな面を知っているからこそ、大多数の人々は「そうなったらい い」とは考えるも、結局は理想論、と見切り、人並で、手の届く平穏な生活を目指す、それもそれでとても幸せなことであり、持論ではあるが現実的でベストだと思われる。

だが、火野映司はその大多数のなかには含まれない、いわば「行動するもの」であった。

貧困国への、個人としては多額すぎる寄付金、支援物資、さらには自らの足で内紛地域に旅をすることもあった。

まさにその行動は人から評価されるもの、綺麗事を実行した青年は、実際にそのような評価を得て行った。

・・・だが、個人１人の力、体では、人と人との争い、というものはや人間の遺伝子に染みついた負の歴史を終わらせることなど、やはり叶わない夢であったことを、映司は知った。

その先に待っていた、自分の思いとは相反する現実、周囲、それが同時に降りかかり、理想と現実とのジェネレーションギャップによって、「今」の火野映司が完成されたのだ。

今の彼の唯の欲望でもあり、夢でもある願い・・・「すべてを救える手」。

誰にも理不尽な理由で死んでほしくない、傷ついてほしくない・・・そんな願い、そしてその願いを強くした過去があったからこそ、彼

はこのクラナガンの街を走っているのだ。

自分が半人間半グリードの異質な存在だからこそ感じれる、グリード、ヤミーの気配、それの中心地に向かい、映司は駈けていた。

ここミッドチルダで確認されているグリードまたはヤミーは、話によれば「無償での人の救済」を行っている、いわばおそらくそれを「欲望」として動いている。

一見その事実は聞こえがよいかもしれないが、火野曰く「行きすぎた正義は暴力」だ。

実際に、正義を欲望としたヤミー、バッタヤミーの歪んだ正義の行きつくところを知っているし、そういったことが原因で争いを生んだ国や地域、小さな村をこの目で実際見てきたからなまじ理解してしまっている。

火野の知っている大多数のヤミーは、詰まる所人を傷つけてしまっている結果を出している、ある程度の認識や独自の理解を持っているグリードと違い、ヤミーは単一として欲望の感情しか持っていないため、悲しくても「その存在を倒す」ことしか選択肢はない。

欲望に呑まれ暴走した結果そうするしか道は無い、純粋に欲望を追い求めていたものは殺すしかない、それは文面的に酷ではある、だからこそ映司の気持ちには焦燥感が積もっているのだ。

映司のグリードの一片としての感覚が、目的地への接近、到着を知らせる。

それと同時に、映司はとある多次元料理の店の近くへと到着した。

店のニュアンスからして、おそらくクスクシエと同じような類の見せであろう、近くに来たならば名のごとく様々な香りが楽しめる、と予想できるのだが・・・。

そんな食欲を増長させる類の匂いなど皆無で、あるのはさきほどまで緊迫、否、依然として、いやそれ以上に緊迫している雰囲気を放っている店内の様子と、年相応とはいえないボロボロと涙を流し、

助けを請う、足と腕を凍らされた男の集団5人、そして・・・その様子を見ながら、いや、監視しながら仁王立ちしている緑の異形・・・あの姿は周知している、自分が都市伝説を聞いて最初に思い出したヤミー、バッタヤミーと、先ほどまでの状況のためか、以前恐怖に震えている店の客一同、いや、おそらく恐怖の理由はほかにある・・・頭は骸、紫を基調としたボディ、合成獣の面を垣間見せられる混沌、なにより映司、否、映司達が驚いたのは・・・その姿は、まさに映司自身がグリード化した時の姿と瓜二つであったのだ。
その映司グリードもどきは、その恐怖を覚える姿とはまったく相反して、覚えている客一同に「もう大丈夫ですよ。怪我は無いですか」などと心配している、が、それはまったく一同の耳に聞こえていない様子で、むしろ声をかけられるたびに理不尽な恐怖を覚えられてしまっている。
その姿、その動作、そしてその優しそうな青年のようなグリードの声を聞いた、映司に憑依しているグリード一行は、口をそろえてこう述べた。

「あれ、映司じゃねぇか。」

「映司、映司がもうひとり。」

「僕の耳と目が正しければ、あれは映司だね。」

「あらぁ、あなた、グリードの双子でもいたの？」

「あきらかに映司だな。俺の目と耳と虫の報せてきな感覚がそういっている、絶対に正しい。」

「・・・俺って、はたからみればあんな感じなの？てかメズールさんのコメントおかしいでしょ？」

緊張感はどこへいってしまったのか、その姿似つかわしくないグリードの様子に、異形慣れしていている面々はおもむろにコメントを出しあっていた。
その様子と気配に気づいたのか、謎のグリードとバッタヤミーが、同時のタイミングでこちらに視線を向けていた。
だが、それを見た2人の異形も大層に驚いた様子らしく、時折頭をかきながらとまどいの嗚咽を発していた、そんなところを見ると、正直人よりも人間臭い、と感じたのは映司一行。

「・・・あれ？その気配、俺がもう一人？」

「・・・見た目的に、おそらく紫のグリード・・・だよね？でも・・・。」

『どうみても映司が2人です（だよ）』

「・・・面妖な。気配を複数感じる。」

まったく同じような反応をした紫のグリード、それにやっと「自分の写し身みたいだ」と自覚する映司、それにまったくの同意を見せるグリード一行、それに比較的冷静、というよりハードボイルドに一言を放ったバッタヤミー・・・姿以外はシリアス生分皆無な様、だが傍から見れば2人の異形に見つけられ、いまにも襲われそうな人間に見えてしまう、実際、恐怖におびえ聞き耳たてずの客一同にとっては、お互いの正体を探り合いながら殺気を放っている光景、理解と誤解は紙一重、とよく言ったものだ。
だが、そんな現状を完全に理解しているわけもなく、異形2人と映司一行の間には、驚きと困惑、なにより「疑問」という2文字が大きく渦巻いていている。

しかし、悠久な時などの生き物でも嫌うようで、その状況を打破しようと口を開いたのは、何を隠そう明確な目的があってここにきた映司だ。

「・・・ところでそちらは、今まで行った何を？」

「え・・・あ、ああ！いや、この店が強盗にあってる、て知って、それで早速捕まえたところなんですよ。」

「・・・そういうことだ。」

と、バッタヤミーが示すのは、カッチカチに容赦なく凍らされた手足の持ち主である犯人集団。
それを見た映司一行、特にバッタヤミーについてよく知っている映司とアンク、そしてウヴァは見解の相違にさらなる疑問を生み出すしかなかった。
バッタヤミー、そしてそこにいる映司もどきグリードの目的、つまり欲望は、予測するに「正義を為すこと」これに関してはバッタヤミーは変わらない。
だがしかし、映司の知るバッタヤミーと、目の前にいる犯人集団ににらみを利かせているバッタヤミーとは、内面的なところで相違があるのだ。
バッタヤミー・・・人一倍正義感が強い男、神林進の欲望によって生まれた昆虫系のヤミーで、その欲望は「正義感」。
しかし、欲望に囚われしものに理性というものなどなく、行きすぎた懲悪、正義によって「暴力」しか生み出せなかった。
そんな行きすぎた正義との相違・・・それは、明らかに目の前のバッタヤミーからは「独立した人格、理念」を感じることだ。
あのバッタヤミーは、映司の知る限りでは、まるでうわごとかのように、悪への憎悪を述べているだけの、映司いわく「人形」、だが

目の前のバッタヤミーからは、憑依しているグリード一行のような、人間で言う「自覚」、「理性」、そして「個性」を感じる・・・詰まる所、映司の知っているヤミーの立ち振る舞いではない。
さらに、目の前にいる映司そっくりのグリードらしき異形、映司一行は、これが自分の追い求めていた存在だと勘付いたが、正直疑問が倍増し、この異形2人に聞きたいことは多々ある。
欲望のままに行動するヤミーとは違い、この異形らには話が通じる理性があるため、もう少しコンタクトはとれないだろうか・・・そんなことを模索していた時、その刹那であった。

【Sonic Move】

外からかすかに聞こえる無機質な男の声の電子音声、それとの刹那、その同時のタイミングに、映司と異形らとの間を陣取るかのように、金色の閃光、それに追尾するかのように鳴り響く空を切る音。
その閃光の速度が想像異常なためか、空を切る音は轟音に近いものとなり、映司と異形らは現在位置から2歩前後身を引いてしまう。
撃がる刹那の文字、アクションの移り変わりは一瞬、その閃光が姿を消したかと思えば、その閃光の中から、なんと人影が見えるではないか。
昼でも、否、昼の光満ちる時間帯だからこそ映える金髪、そのロングツインテールの風に流れる様は一瞬見惚れるもので、同時に背中にあるマントも視界にでかでかと介入してくる。
その容姿は、一般人多数が感じる「美人」といえる分類で、顔もこミッドチルダの現地人にはよく見知られている顔。
その女性、金髪の、黒の服装の女性は、気圧を感じさせながら開口一番を飾った。

「そこの未確認(アンノウン)！一般人に危害を加えるのはやめて、管理局に投降してください！」

その言葉は、あきらかにバッタヤミーと映司そっくりグリードに発せられたものであり、その意向を重々示すかのような証として、女性は両手で黒のボディを持つ、金色の鎌の切っ先を異形に向けている。

だが、それと相反した様子で、紫のグリードは「いえいえ！まったくそんなことは！」とジェスチャーすら繰り出しながら焦っており、バッタヤミーの方など「またこのパターンか・・・。」とため息を吐いていた。

バッタヤミーのあきれている要素は、自分を見た目で判断されていることではなく、ここ最近こんな風に管理局員に出会っては、状況を見ずにこちらに武器を向けてくる「状況理解力」のなさに嘆いているのだ。

おかげさまで、こんなパターンを繰り返し、挙句には2回ほど目の前で悪事を行っていた犯人を逃がしてきて、また捕まえに行く、という二度手間を経験してしまい、今回の事件の犯人相手には、少々凍傷を残す可能性に申し訳なさを感じながらも、いつも以上の強度の氷結を頼んだ、とい閑話もある。

ともかく、相手側の女性には敵意しか感じられない様子で、説得は通じない、と異形2人は思考。

そもそもなぜこの異形らは管理局の追手から逃げているかというと、答えは明白、異形らにも「自分の存在は異質である」という自覚があるから。

自分の存在は世界に騒動を起こしてしまう、だからこそ影から人を守る、というなんともけなげな心遣いであるのに、管理局はこの心遣いをどうも無駄にしてしまう傾向があることに、バッタヤミーはほとほと困り果てていた。

この状況で取るべき行動は一つ、悲しいことではあるが・・・。

「・・・逃亡御免。」

「すいません！あと、そこにいる犯人さん達をよろしくお願いします。」

「そんなことさせな・・・うわっ！？」

謝罪の言葉を述べた後の行動は、女性の高速移動並の速さで移り変わった。
紫のグリードが不意と大きく、しなやかな紫の翼を一瞬で広げ、店内に開眼さえ難しいほどの強風を発生させ、その目くらましの刹那の間に、グリードはバッタヤミーを抱え、割れた窓から目にもとまらぬ速さで空へ飛び立ってしまった。
あきらかに手慣れている手口、逃げられたことに少々の悔しさを噛みしめる金髪の女性、しかし彼女もこういったことに慣れているのか、頭の切り替えは早かった。
悔しそうな先ほどまでの顔はどこへやら、いかにも心配そうな赴きで、先ほどの異形に襲われそうになった（ように女性からは見えた）青年の元へ駆け寄る。

「大丈夫ですか？怪我は？」

「あ、いや、怪我はないですけど・・・それよりもはやくあの人達を・・・。」

「・・・怪我がないなら安心しました。私はこれにて失礼します。」

・・・心配される要素に心あたりのない映司であるが、さきほども言った通り、慣れているためか行動の切り替えは早く、そんな言葉を残し女性は犯人集団の連行へと行動を移す。
しかし、その女性の顔を間近に見た映司、否、映司とカザリ、そし

てメズールといったある程度頭が回る者たちは、あの顔に引っ掛かるものがあった。
そしてその引っ掛かる要素をいち早く確定させたカザリが、不意と口を開くのだ。
「映司、あの人確か、フェイト・T・ハラオウンっていう人じゃなかった？ほら、昼食の前に読んでた雑誌に書いてあった。」
「私も思い出したわ。J・S事件を解決に導いた機動六課、っていう特集記事に載ってた、確か・・・執務官？だったかしら。」
その言葉を聞いた映司も確実に思い出した、そうだ、伊達が「この世界の情報源」と言って買ってきた雑誌の特集記事に載っていた人物、最初は後ろ姿だけで分かりづらかったが、容姿端麗なその姿は記憶に刻み込まれるものであったことは覚えている。
やっぱり、この世界に来たからには、色々ろ調べてみないといけないかな？
と、映司は多々の疑問を抱え、自分の拠点へと戻っていくのであった。

正義を為し続けていく、　爆散したはずのバッタヤミーと紫の映司そっくりなグリード。
それら未確認の存在に、過度な危険性を自ら見出してしまっている管理局の面々。
謎が謎を呼ぶ状況に置かれてしまった、事情をまだ知らない映司とグリード一行、伊達。
この３つの要素は、この世界に何を為す？

Next Coming OOO!! Can you be HERO?

第一話終わりました。

未確認、という呼称は、みんなも勘付いている通りクウガやアギトへのオマージュです、はい。

未確認に過剰反応な管理局、まぁ、大きな事件が起こって間もないせいでもあるので、みんなはフェイトちゃんを責めないでやってください。

今見直してみると、なんとも同じような言葉回しばっかりで、少々自信がメルトダウンしてしまうのですが、それは割り切りましょう、うん。

後、この小説のタイトルは思い切りオーズなのですが・・・実を言いますと、他の平成ライダーからもキャストが来る予定です、しかもこれまた例外的な。

もしかすると近いうちに出てくるかも？

それではノシ

Count The Story's 2　Mの影／8人のNEVER ＃1

今回の話の設定は、おそらく賛否両論となるものでしょうが、温かい目で見てやってください。

思いっきり、この作品は序盤のバッタ達もこれからの展開ふくめ自己満の塊ですので。

感想で、この方針でいいか聞きたいですね、めんどうだと思われますが、よろしくお願いします。

人によってはよろこぶ・・・と思いたいなぁ。

と、言いますか、まず8人のNEVER、て言う時点でかなりの地雷臭しますしねぇ・・・うわやめろなにをす（ry

不快にさせた場合にそなえ、今のうちに謝罪したいと思います。

Necro（ネクロ） Over（オーバー）、通称及び略名「NEVER」・・・「死」という固定的概念を、文字通り「超えた」存在。

その正体は、現代科学の粋を集めて完成された、死人をある意味蘇らせる、まさに神の所業に真っ向から喧嘩を売る、人間の愚かな創造の一つ。

大きな欠点がいくつかあるものの、その特徴としては、人間離れした身体能力、どんな即死に至る損傷でも耐えうる人間離れした耐久力、再生能力。

その動く様は死人とは思えないながらも、いくら骨が折れようと、心臓が打ち抜かれようと笑って余裕を出している様はまさに死人としか思えない、能力的にも人道的にも矛盾を背負う、本来、許されざる存在。

そんな存在に対し、一般人はまさに「死神」やら「地獄からの使者」とも言うし、なにより実際そんな2つ名があってしまっているのが現実、そう、その2つ名の通りに、彼ら、NEVER8人は世界をまわっているのだ。

傭兵集団「NEVER」・・・テロリストの掃討などの危険気まわりない仕事を受け、各地の紛争地帯や街を「地獄」と化した、不死身の集団。

正確には、そうした荒事を行っているのは5人中心で、他の3人は比較的穏やか、とは言ったものの一般からしてみれば危険なことには変わりのない仕事を受けている。

先ほども述べたとおり、NEVERの構成メンバーは8人プラス1人。

組織であるＮＥＶＥＲのリーダーであり、この世で最初のＮＥＶＥＲとなった男、そしてＮＥＶＥＲの生みの親でもあり、その人物の母親でもある大道マリアの息子・・・統括者、大道克己（だいどうかつみ）。

ＮＥＶＥＲの副リーダーであり、組織のムードメーカーらしきポジション、自称レディーの１人である、世間一般に言われる「オカマ」である男性・・・副リーダー兼ＮＥＶＥＲの艶やかな鞭使い、泉京水（いずみきょうすい）。

その眼光はまさに猛禽類、生前の通称「青の鷹」と呼ばれたＳＷＡＴ一の狙撃手でありながら、死人の体を引きずりながらも家族を愛し続ける男・・・ＮＥＶＥＲの青の鷹、無慈悲な狙撃手、芦原賢（あしはらけん）。

ＮＥＶＥＲ一の怪力、縁の下の力持ちを体現したかのようなその強靭な肉体はまさに熊、棒術にも精通し、こよなく自然を愛している大男・・・ＮＥＶＥＲのパワーソルジャー、堂本剛三（どうもとごうぞう）。

ＮＥＶＥＲの紅一点でありながら、その女性らしさを感じさせるフットワークとしなやかさ、死人らしからぬ情熱を持ち、時として冷酷さも垣間見せる表裏一体の様・・・ＮＥＶＥＲのファイアレディ、羽原（はねはら）レイカ。

そして・・・ＮＥＶＥＲのＴＯＰ３、その情報解析力と整理力には秀でるものがあり、ＮＥＶＥＲの参謀役、なおかつ個性派ぞろいであるメンバー勢を取り結ぶまとめ役・・・ＮＥＶＥＲの頭脳、松井（まつい）誠一郎（せいいちろう）、通称「マツ」。

マツの唯一無二の相棒であり、他のメンバーとは一定の距離を持ちつつ、自分の信念を貫き通すハードボイルド、そして裏社会での通り名「骸の裁断者」を持つ自称「死人探偵」・・・ＮＥＶＥＲの外

れ狼、鳴海荘吉（なるみそうきち）。
その口調は元セールスマンの雰囲気を感じながらも、その話術の秀でる面からＮＥＶＥＲの交渉役となっている優男、なにより自分の「町」を心から愛し、その未来を誰よりも大切にする男・・・ＮＥＶＥＲの交渉人（ネゴシエーター）、園崎霧彦（そのざききりひこ）改め須藤霧彦（すどうきりひこ）。

そのメンバーらを影から支え、ＮＥＶＥＲという存在の成り立ちを考えるならば、彼らには無くてはならない存在、大道克己の母であり、彼の心の中にある正義を密かに願っている女性・・・ＮＥＶＥＲの生みの親、プロフェッサーマリア、人の名を、大道マリア。

危険な場所に赴き、思いっきりに暴れるのが仕事（京水談）である彼らだが、仕事がない、いわフリーの日の彼らには、地獄の使者、という名を忘れ、それぞれのやりたいこと、やるべきことを為す。まぁ、その前に、仕事もなにも無い日など、３か月に一度の割合なのだが・・・。

傭兵集団、とはいえども、その面が見られるのはどちらかと言えば仕事の時のみであり、個性派ぞろいなメンバーであるため、まるで童話小説などに出てくる陽気な海賊集団、という表現がぴったりか。そのにぎやかさが、とある１人の女性の存在によって、さらなる加速をしているのが現状だ。

「いい！レディーの料理ってのはね！その人への愛と！純情を！惜しまなく入れ込むものなのよ！」

「愛と・・・純情・・・？」

「そう！私は克己ちゃんと！霧彦ちゃんと！荘吉ちゃんに！惜しまなく！ぎゅうぎゅうに！見て！料理に愛を流し込んでいる私は！ま

さに曲線美よ！くねくねよぉぉ！！」

今、京水に料理のいろはを教わりつつも、明らかに次元違いなテンションに戸惑いを示している女性、名前をミーナという。

少し前、とあるテロリスト集団掃討の任務において邂逅し、そこから始まった「クオークス」及びその背後に感じた財団Xの影とのビレッジでの戦い、その戦いの後、実験動物でしかなかった生き場のない彼女を、荘吉と克己が見兼ねて、こうしてNEVER基地兼研究所においてかくまうこととしたのだ。

ミーナもまた、行きすぎた科学によって運命を左右されてしまい、人には過ぎる力を得てしまった人の１人、異質である存在に自分の存在を重ねたための同情か、はたまた克己と荘吉の人の心がそう願ったのか・・・その真実は誰にも知らない。

しかし、この場にいるもの達の様子も、なんとも一者一様で、京水は知って通り、今まで料理を作ることがなかったミーナに、この組織レディー？代表として料理を厳しく・・・というより我流に教え込んでおり、にぎやかな食堂をよそに、研究所の一室の隅では芦原が丁寧にスナイパーライフルの手入れを行っている。

ところ変わって研究所の戦闘訓練室では、紅一点のレイカと、怪力の堂本がそれぞれの得意とするもの、レイカは軽いフットワークからの流れる蹴りと拳、堂本は怪力による拳の一撃とそのダイナミックさに驚きすら覚える棒術によって、まさに人外な模擬戦闘を行っている。

お互いに自然と笑みこぼれているところをを見ると、戦闘狂（バトルマニア）であることがうかがえてしまう。

ぱっと見、この研究所内に、リーダーである克己の姿が見えないが、彼はマリアと一緒にこれからの活動方針について研究所の奥出話し合っているようだ。

こちらは研究所の様子だが、この場所の存在はもちろん公にはなっ

ていない。
ならばどこにあるのか、という質問が浮上してくるであろう、実を言うと、この研究所はとある事務所の地下にでかでかと建設されているの。
アメリカの郊外、その郊外の裏通り、一見そのような施設があるなど思えないようなうす暗く、人気のない場所、ここにNEVERの本拠地、そしてその隠れ蓑兼荘吉、マツ、霧彦の隠れ探偵事務所があるのだ。
もちろん、基本目立ってはいけないので、わざわざ探偵事務所を示す看板などない。
だが、世界の暗部、つまり裏社会では有名な探偵事務所で、いかなる危険な仕事でも金をある程度積めば確実に遂行してくることから、通称「仕事人」と呼ばれている。
しかし、この探偵事務所が、全世界で有名な傭兵集団並び犯罪者集団の隠れ蓑に、はたまた事務所の主である荘吉以下事務所メンバー3名がその組織のメンバーである、という事実は一般にあまり知られていない。
実際、この探偵事務所にいる3人、荘吉、マツ、霧彦の様子を見た者は、そういった仕事を主とするものだと第一印象では見えないであろう。

「今日は比較的静かでゆっくり日だね、荘吉。」

「・・・俺たちに、平穏はない。」

「まぁまぁ、そう気張らずに。荘吉さんも、コーヒーはいかかですか？」

「・・・もらおう。」

平穏に見える今日を再確認するマツ、比較的口数少なく、タイプライターで何かの書類を書きあげている荘吉、あくまでリラックスを見出そうとする霧彦。
こういった光景がある今なら、平穏と安らぎを求めるマツと霧彦の気持ちも理解できるものだ。
しかし、彼ら、特に荘吉は「骸の裁断者」と呼ばれる実力者、なおかつ、外れ狼であるながらも、彼も傭兵の１人。
・・・真なる平穏などないと、彼自身が一番自覚しており、現実もそうなのであるのだから。

事務所の扉が３回ノックされ、客人の来訪を知らせたのは３人がコーヒーを飲んでいた時のこと。
その刹那、霧彦はお得意の営業スマイルを浮かべながら「どうぞ」と簡単に一言。
やはり元セールスマンなだけに、こういった対応の心得は会得している様子。
その声にいち早く反応し、その扉は呼応するかのごとく開かれる。
客人と思われし人物は、２０代前半だと予想できる女性、きっぱりとしたレディースースーツを着用しており、典型的なキャリアウーマンを彷彿とさせる。
ただの客人、この探偵事務所の客人であろう、と霧彦は予想したが、荘吉１人はその探偵に備え付けられている直感の一種で、只の客人ではない、と思っていた。
・・・そしてその直感が、良くも悪くも当たり、なおかつこの平穏をぶち壊しとするものであった。
「依頼人（クライアント）の代理できました。傭兵集団ＮＥＶＥＲの皆様。」
その声にいち早く反応し、今すぐに招集を要請したのはまとめ役の

マツ。
その後の集合は早く、事務所の仕掛け扉、一見荘吉の帽子掛けのスペースに見えるそれから、ぞろぞろとＮＥＶＥＲのメンバーが集合していく。
その様は先ほどの様子とは打って変わり、雰囲気はまさに仕事人、レイカと堂本も、生ける人間であったらかなりの発汗をしているはずなのだが、ＮＥＶＥＲは死人であるため代謝がない、そのためまったくの疲れた様子もなくここに集合した。
合計８人、まず、交渉役である霧彦を中心として、任務の確認を行う。

「それでは、依頼の内容を確認させてください。」

「・・・その前に、とあるお方からお話があります。」

霧彦の問いかけに答えるよう、女性はどこから取り出したのか、とある大きめのディスプレイをメンバーの前に出す。
その刹那、デン！と大きめな電子音が鳴ったのは一瞬、その音量に一般人は驚くこと間違いなしであろうが、修羅場を駆け巡った彼らに動揺の色はない。
さらなるその刹那、その画面に光が宿り、画面にとある中老の男性が映り込んだのも一瞬、その男性の見知らぬ顔に相変わらずのノーリアクションではあるが、それをよそにその男性は笑顔で繰り出すのであった。

『初めまして！ＮＥＶＥＲの諸君！私が今回の依頼人である鴻上ファウンデーション会長の鴻上光生だ！』

ただ、鴻上ファウンデーション、という名が出た瞬間、克己はにやりと微笑した。

鴻上ファウンデーションン、表では一般的に言われる大企業であるが、裏では色々な意味で有名な会社、噂では「世界の４０％を掌握している」とも言われている、力がある企業だ。
その大企業の会長直々の依頼、というのだからかなりの高収入が期待できるであろう。
だが、克己が期待したのはそこだけではないのだが、その内心は誰にも知らない。

「それでは・・・鴻上会長、依頼とは何でしょうか？」

『・・・その依頼を説明する前に、君たちには世界の事実、というものを説明しなければならない。』

「真実・・・で、しょうか？」

『そうだ。・・・君たちは、異世界、はたまた、魔法、というものを信じるかね？』

？マークを浮かべるメンバーをよそに、鴻上はそれらの単語についての説明を始めた。
この世界は次元という筒の中にある多々の世界の１つでしかなく、次元には様々な異世界が存在すること、その中の１つの世界「ミッドチルダ」を中心とした「魔法」と呼ばれる技術概念の存在のこと。
しかし、あまりにも唐突な上に突拍子な話に困惑と疑念が渦巻いているのが現状の事実、だが鴻上はまだ笑顔でいることからこういった事態は予想済みらしい。

『それは困惑もするだろう。だが私から見れば、死人がそうやって動いている、ってことのほうが驚きだけどね。』

その言葉を聞いた一同は、やっととして動揺の色をかすかに見せた。
なぜならば、一部の裏の人間しか知らない、普通ならば知りえない事実、自分たちの正体をを、この目の前にいる男は知っている赴きでいるからだ。
さらに笑顔を見せている様子を見ると、おそらくどうやってＮＥＶＥＲが存在しているか、ということも知っている、そういった予想を立てた克己は、その情報収集能力を評価しながら、さらに笑みを浮かべた。

『話を続けよう。今までの話を聞いて勘付いている人もいるだろうが・・・君たちには、早速その世界、異世界ミッドチルダに行ってもらいたいのだよ。とある任務を遂行するためにね。』

「その任務とは？」

『うむ。君たちには、しばらくその異世界で私の指示に従い動いてほしい。もちろん、長期において動いてもらうのだから、金は弾むよ。』

皆が顔を険しくしているときでも、やはり霧彦は優秀な交渉人、いかなる時でも笑顔は絶やさない。

「どれくらいで手を打ってくれるでしょうか？」

『ふっ、そうだね・・・１回の仕事につき、最低１５００万でどうだろう？もちろん、拠点の準備とあちらでの生活の充実を約束しよう！もちろん、仕事によってはさらに倍！どうだろう！なかなかいい仕事ではあると思うのだが？』

「なるほど、それはまた太っ腹でいらっしゃる。・・・リーダーは、

どうでしょうか？」

「・・・おまえ達はどうする？」

早速依頼受諾を決意した克己だが、その視線を荘吉ら3人へと向けた。

そもそも、なぜ彼らがあまり他の5人と行動しないか、それは荘吉の「暴君共の悪事に手を貸すつもりはない」という意向によって行動を共としないのだ。

一緒に行動するときは、自分の目的と一致した時や、その依頼の内容によって変わるので、通称「外れ狼」も納得である。

だが、その推理力、格闘能力、その態度は他のメンバーからは一定の信頼を置いており、実際外れ狼ながらも影のまとめ役として働いている。

だが今回は、荘吉の顔を見る限り乗り気ではないらしく、荘吉が否定の意を言葉にしようとした時、鴻上が介入、否、爆弾を投下してきたのだ。

『そういえば、会社の情報網がキャッチした情報でね、なんと！ミッドチルダのとある場所にガイアメモリの工場があるのだよ！』

その言葉を耳に入れ、表情が明らかに変わったのは荘吉、克己、そして霧彦。

一方は多大な期待を込めた笑みを浮かべ、一方は視線と表情が一層と険しくなり、もう一方も何かの敵意に近いものを感じれる。

鴻上の推論だと、わざわざ異世界に建造したのは、ガイアメモリの存在を知らない異世界で製造し、なおかつ異世界の存在を知らない地球人の目から逃れられるという2つのメリットがあるからだろうと予想。

そして、その工場の存在によってもたらされる可能性・・・それは、

その世界でメモリが広まる可能性があることだ。
なぜ鴻上がそのような情報を持っていたか、予想されるは財団X系列にスパイがいることであろう、だが、今考える問題ではない。
鴻上のこの情報を伝える意味、それは単なる「餌」でもあり、意義でもあった。
「この男、確かに鼻はよく効くし、頭もまわるようだ」と克己も関心している。
その話を聞いた荘吉一行は、少しのシンキングタイムの後に、鴻上が図った通りの返事を返すのだ。

「・・・同行しよう。ただし、基本はいつもと一緒だ。」

「ふん。・・・依頼人さん、その依頼、喜んで受けるぜ。ただし、向こうでの行動は、依頼以外は自由にさせてくれよ。」

『もちろんだよ！ただし、あまり名の売るようなことはしないほうがいい。向こうはこっちと勝手が違うからね。・・・それでは、詳しい話はそこにいる里中君に聞きたまえ。私はこれにて失礼するよ。』

その返事に大変満足したためか、一層と大きな声を荒げながら笑い声を発していた。
その言葉を最後に、大きな嵐は一旦として台風の目を見せたのだ。

その後は鴻上の代理である女性、里中エリカとの長時間における会議、内容は、向こうの世界での処遇、手はず、報酬金の振り込みなどなのだが、異世界での仕事、とはいったものの一般的な事務処理だけの話で終わり、詳しい手はずが決まった。
ミッドチルダへ出発するのは1週間後、拠点付近において転送し、任務申請時までは自由に行動していいこと、なにか必要な準備物が

あれば申請すること、など好条件が重なっていく。
その処理を行っていたのは主に、リーダーである克己と事務担当でもある霧彦、その好環境、十分な報酬金に大きく2人はうなずき合っていた。

・・・その裏で、荘吉は居候であるミーナを呼び出した、目的は、向こうに滞在する間のミーナの安全確保について、自分達がこれから遂行する任務及びその危険性の説明も織り交ぜてだ。
彼女は超能力を扱えし存在、その存在のためかさまざまな危険が降りかかるであろうし、向こうに連れて行くにもそこはそこで危険が付きまとう、なおかつ彼女の存在は、言っては悪いが邪魔となる可能性も歪めない。
確かに彼女は優れた超能力の資質を持ちし者として実験動物の人生を強要されてきた存在、だがNEVERの行う仕事との必要な力とはこれまた違ったものがあるのだ。
長期における滞在任務、向こうは元の世界とかなり勝手が違うため、正直完璧に守りきれる自信がないのも本音の1つであった。
荘吉は異世界に行こう、と決意した瞬間、ミーナの処遇について疑問が浮かび上がったのだが、その問題は早急に解決したらしく、ミーナにこれからの指示を煽っていた。

「いいか、俺達が出発したら、お前はこの場所に向かって、メモに書かれている2人にこの手紙を渡せ。・・・ただし、俺達、特に俺のことは伏せろ。」

「でも、この人たちも危ないんじゃ・・・。」

彼女が心配するのも無理はない、相手は大きな影と力を持つ財団X、ガイアメモリの存在もあってか一般人に太刀打ちできる相手ではない、と組織に関わってきたミーナがよくわかっているのだ。

だが、彼女の心配する様と比例するように、自信のある声で、一層と帽子を深々とかぶり直しながら、自分の中にある確信めいた予測を述べるのだ。

「心配はない・・・とはいえない。確かに、そいつらは半人前。だが・・・文字通り体を張って、お前を助けてくれることは、確かだ。」

その声は、かすかに懐かしむものを感じるもの、その背中は似合いすぎるほどの哀愁。
そしてその顔は・・・かすかに、微笑していたようにも見えた。

ミーナが荘吉に渡されたメモ・・・日本のとある住所、電話番号、そして・・・。
「風都　鳴海探偵事務所　　左翔太郎　フィリップ」と、確かに書かれてあった。

その夜、克己から伝えられた、ミッドチルダでの初仕事。
それは・・・。

「1週間後、ミッド北部のガイアメモリ工場の襲撃を行う。」

工場の襲撃、及びそのガイアメモリの奪取。
それは、ビレッジで出会った「E」のメモリと出会うための布石。
そして・・・異世界で、NEVERの名を刻む記念すべき「花火」でもあった。

その男は、死人の体を引きずり、なにかを求めていた。
自覚などない、だが傍から見ればそれは明確なもの。
仲間、同類、自分が異質な存在だからこそ求めたもの。
それは俺達7人の運命を180度狂わせ、「永遠」と錯覚する偽の「生」を与えられた。

次に求めたもの・・・それは、死人である彼にとってはとっくの昔に奪われた「明日」。
その冷たい体を引きずり、あくまで現世で為したいこと。
それを男は探し続けていた、ただし、生きとし生けるものには保障されているそれが、死人などにあるはずなどない。

ならばどうすればいいのか・・・男は考え、きっかけによってそれの答えを見つけた。
だったら自分で作ればいい、それをつかめばいい、探して、探して、死人なりにあがけばいい、と。
そして、男は大きな「変革」を行おうとした。
裏の大きな影を根絶やしにし、この世に大きな「花火」をさかせよう・・・と。
求めたのは力、大いなる力を使いし資格がある、と男は気づき、それを手に入れようとしている。
そして、死人を統べる男は明日を、「永遠」の力に必死に手を伸ばし、死人たちはそれに黙ってついて行く。
死人たちは、はたしてどのような気持ちでいるのだろうか？
自分の中にある「欲」を満たすため、自分の中にある「何か」に応えるため。

だとしたら俺は、「あの風と風の運ぶ笑顔を、遠くから守るため」と大きな声で言おう。
今、ここには「その風」を愛する者たちが３人いる・・・もしかすれば、４人かもしれない。
一度「その風」を泣かせた俺が言うんだ、死人になるのも悪くはないかもしれない・・・オススメはしないが。

Ｓ・Ｍ

（とある男のタイプライターによる記録及び手記）

＊＊＊

１週間、という期間は生けるものはもちろん、死人たちにもあっという間なもので、武器の調達やら準備やらをしているうちに、あっという間に経過してしまうものだ、その期間中３回仕事があればなおさらなものである。
しかし、ＮＥＶＥＲの一員がおもむろに準備している中、とある小さな問題点が見つかったのである。
それは・・・異世界ミッドチルダでは、質量兵器が元の世界以上に嫌悪されて、なおかつ元の世界よりも厳しく取り締まりがされていることだ。
話によれば、拳銃をちらつかせただけで最低１０年は監獄のお世話になるとか・・・。
この話、異世界の常識が大きな問題点となる理由、それは芦原賢の得意とするものが狙撃だということ。
ＮＥＶＥＲの大きな特徴として、飛躍的な身体能力があるため、他

のメンバーはさほど大きな問題にはならなかったのだが、芦原はそれを専門として、能力はあるものの格闘経験はさほどない。
だとすれば、向こうの世界に代替できるものはないか・・・とマツが提唱したのだが、克己はそれにあざ笑いながらこう言った。
「生ける人間の法に、死人が縛られる必要があるか?」と・・・。
その言葉には、自分たちにたいする皮肉があるのと同時に、おそらく、克己の考えるプランも関係あるだろう。

ミッドにあるガイアメモリ工場を襲撃する理由、それは財団Xにさらなる存在の強調を行うことと、可能性の1つとして、「T2ガイアメモリ」の回収だ。
「T2ガイアメモリ」・・・研究施設「ビレッジ」のデータベースからマツが拝借してきたデータに記述されてあった、ガイアメモリのtype2、文字通り新型だ。
旧型との大きな相違、それは「生体コネクタを必要としないこと」、「メモリブレイクされないこと」、そして「メモリが人を選ぶこと」。

そしてデータベースでの記述、「ひとたびなにかの事故によって町などにばらまかれた場合、メモリ自体が人間に入り込み、意思のないドーパントとして暴れまわるだけである」。
財団Xはなんともハタ迷惑なメモリを作ったのか、と荘吉と霧彦、マツ談。
その自由性、厄介さを考えると、同じ「町」を愛するもの達の見解は同一のものであった、「これを風都に流通させてしまったら、面倒にある」と。
それは主なる3人の見解であるが、克己はその特徴に他の可能性を見出していた、それは「生体コネクタを必要としない」という特徴。
人間が使用する場合、財団の者がコネクタ手術をする必要があり、しないものが使用した場合メモリの毒素によって体を痛ませることとなる、それによって簡単に手を出せないのが現実。

しかし、コネクタを必要としない、ということは、財団から敵視されているであろうNEVERの者達にも、手に入れることができれば戦力として「ガイアメモリ」を使用できる、ということだ。
ガイアメモリの力を手に入れれば、これから敵として送り込まれるドーパント達に抵抗できる、それどころか掃討できる力となる。
これからの戦いにもっと大きな力が必要となる・・・そんなことを思わせていた矢先に手に入れた道しるべ、そして一時出会った「E」のメモリの力。
それは、克己の意思に確かな「明日のやるべきこと」を疑似的ながらも示されていた。

（ミッドチルダ現地時刻　AM5；30）
（ミッドチルダ北部　財団Xガイアメモリ工場付近　森林地帯の一角）

ここに、男7人と紅一点、合計8人の影、言わずと知れた、NEVER一行の影だ。
もちろんとして、それぞれお得意の武器を引っ提げての来訪、京水は鞭を、堂本は棍棒を、芦原は法律お構いなく特性のスナイパーライフルを背中に両手にはマシンガン2丁、克己、レイカ、霧彦、マツは死人ご自慢の身体能力を持つ肉体、そして荘吉は・・・腰に、ロストドライバーを。

「荘吉、一番乗りは任せたぞ。」

「荘吉ちゃん！先陣は任せたわよ！」

唯一無二の相棒として荘吉の背中を押すマツ、レディー？代表としてラブコールを送る京水、荘吉を静かに見ているメンバー、それを

背に受けとめながら、かぶっている黒の帽子を一層に深くかぶり直し、荘吉は静かに工場へと向かっていく。
なぜ先陣を切るか、それは1人近づくものあれば、おそらく警備をしている者たち勝手に、それもあなどってくれながら出てくれるから、なぜ荘吉が先陣なのか、それは・・・NEVERの総合的な強さとして、荘吉はトップであり、信用できるからだ。
荘吉が一定距離近づいた瞬間、荘吉のみに照らされるスポットライト、それと同時に5人の男性、それも手に杖の形をしたなにかを持ちながら、荘吉の元へ走ってきた。
近づくな、と典型的な脅迫文句を言いながら、接近を制止させる5人だが、荘吉がそれにひるむはずもなく、それを無視し接近を続ける。
警告は無意味、と5人は判断すると、早速とばかりに杖の先を荘吉に向け、光球らしきものを生成、それにそれなりの速度を加え、荘吉の元へと放った。
しかし、それを回避できずのうのうと被弾する荘吉はたまたNEVERではない、あくまで小さなアクションで回避した荘吉は、光球はガイアメモリの力か？と疑問を持つが、この世界の特徴を思い出し、不意とつぶやいた、「これが魔法か」と。
まだ戦意などおとろえていない5人をよそに、荘吉はその身体能力によってありえない速度の接近、これまたありえない腕力で男の1人を殴りとばし、早々に退場させた。
その様に驚きを隠せない4人、本当に人間か？と1人はつぶやく、が、それは皮肉めいた一言でしかない。
荘吉は視線を動かし、次なる1人に蹴りを入れる、かと思われたのだが、その足は寸で止められていた、男の手から生成された、魔法陣の防御盾により。
異能の力、しかし荘吉は驚きはしない、これもまた魔法なのだろう、と理解しているからだ。

その刹那に放たれる魔力弾、だが荘吉に被弾はしない。
５メートルにも及ぶという跳躍によって、荘吉は４人と一定の距離を取り、４人の様子を見る。
そしてそれを見た４人は、果たして血の気が多いのか、それとも人間離れしたその様に焦ったのか、その男４人は懐から長方形のなにかを取りだした。
荘吉は、そのなにかへの因縁か、不意と視線を鋭くする。

「ガイアメモリ・・・か。」

「ほぉ、これを知っているとはねぇ・・・けど、これが見納めさ！」

その言葉を啖呵に、４人はそのガイアメモリのスイッチをＯＮした。

【ＭＡＳＱＵＥＲＡＤＥ（マスカレイド）】

マスカレイド・・・仮面舞踏会の記憶が収められたそれを、男どもは右首筋にあるコネクタを挿入し、その場所を皮切りに体（正確には見た目上に変化したのは顔だけ）を変化させた。
使用者の身体能力を向上させる効果を持ち、一般に多く流通し、時には財団の戦闘員ともなるドーパント、マスカレイド・ドーパントが、おもむろに視線を荘吉へと向ける。
その視線は確かな殺気を感じ、さきほどの侮り、油断が完全に消え去っている。
それは戦闘にも反映され、生身の荘吉にお構いなく、魔力弾を多量に放ち、時には中距離の砲撃も放たれ体様が今。
その攻撃にみすみす当たりに行く荘吉でもないが、内心しんどさも感じていた。
マスカレイド・ドーパントは、ＮＥＶＥＲだけでも十分に対処できる下級のもの、だが相手が魔法を使うなら別問題だ。

格闘しか能のない本来のマスカレイドとは違い、遠距離からも仕掛けてくる魔導師のマスカレイド。
勝手が違う戦いに押され始める荘吉、その劣勢が、荘吉にある決意をさせた。

「どうしたぁ？動きを止めた、ってことは、降伏かな？」

「・・・俺はあまりこれを使わない主義なのだが・・・相手が相手なら別問題だ。・・・他の奴らも待たしているしな・・・。」

「はぁ？なにをほざいて・・・そ、それは！？」

男の１人は、荘吉が懐から取り出したそれに驚きを隠せない。
それは、まだこの世界に流通させてない、この世界でなら、財団の関係者以外には所持できないはずの代物・・・ガイアメモリなのであるから。

さらに男は驚きを覚えることとなるのはその刹那、荘吉は黒のスーツをどかし、腰にあるそれを男に示す。

男は、それがなんなのかを、不幸にも知っていた。
財団のデータベースを覗いたとき、不意と好奇心に駆られ、その存在を知った、しかし、同時にそれの力も知ってしまっていた。
ガイアドライバーの一種で、ガイアメモリ１本の力を最大限に解放する、いわゆる変身アイテム。
赤を基調とした、「ロストドライバー」であったのだ。

【ＳＫＵＬＬ（スカル）】

骸・・・骸骨の記憶が収められたそれのスイッチをＯＮ、独特な電子音声を鳴らし、荘吉は、改めてこの「鎧」を背負う決意を、黒の帽子を一度脱ぎ、この言葉で静かに示すのだ。

「・・・変身。」

【ＳＫＵＬＬ】

スカルメモリをドライバーへ挿入、再び鳴り響く電子音声、その一瞬で、荘吉の体は一層と強靭な肉体へと作りかえられ、「骸の裁断者」の名の元となった姿へと変化するのだ。

荘吉は頭に再び帽子をかぶり、その視線を一層とした殺気で返した。首には黒い、ボロボロのマフラーを締めており、体は人間の亡骸を模したもの、顔も、まさに骸骨という表現が似合ってしまう不気味さ、死人である彼にはぴったりすぎる姿・・・仮面ライダースカルが、ミッドの地へと現出した。

「クソッ！面倒な奴を相手にしちまった！」

その言葉の通り、先ほどからマスカレイド・ドーパントが戦闘や魔力弾によって必死な攻撃を行い続けているのだが、さきほどの劣勢は影すらなく、スカルはその本人の自慢の身体能力が相まって、ドーパントでも真似ができないほどの格闘戦を見せている。

跳躍によって攻撃をかわし、格闘ではほとんど太刀打ちはできない、さらには魔力弾は被弾するどころかその腕力ではじかれる始末、格闘能力は極限に高まり、盾、プロテクションは砕かれてしまう。

そして、その一方的な戦いに終結を呼ぼうとしたのは、紛れもなくスカル、その示しとして、どこからかスカル専用の武器、スカルマグナムを取り出し、ドライバーからメモリを取り出す。

トリガーの限界突破による必殺技・・・マキシマム・ドライブでの布石であった。

【ＳＫＵＬＬ！ＭＡＸＩＭＵＭ（マキシマム）　ＤＲＩＶＥ（ドライブ）！】

スカルマグナムにメモリを挿入し、マキシマムドライブを発動、その刹那、マグナムから強力な破壊光弾が４発、マスカレイドに向け発射された。
だがそれにマスカレイド抵抗しないわけもなく、それぞれ魔力光が違う魔法陣の盾を展開し、その光弾に抵抗の意思を見せる。
だが、所詮は一介の一般魔導師の展開した盾、魔力資質は優れたものではなかったらしく、さらにはそのマキシマムドライブの強大な威力によって盾を貫通、光弾はマスカレイドにクリティカルヒットし、悲鳴を上げながらマスカレイドを地面に伏した。
そして、それぞれのマスカレイドは、メモリブレイクされずにそのまま消滅する、という特徴にのっとり、粒子となって消滅したのだ。

その様子を見計らい、待機していた残りの７人も前へ出る。
お互い、これから出てくるであろう敵の手ごわさ、先ほど思い知らされた面倒さに警戒している様子で、一方筋金入りの戦闘狂である堂本は敵の手ごたえありな様子に舌舐めずりしながらはちきれんばかりの期待を秘めている。
これからの行動の手順はこうだ、これからあふれんばかりにでてくる刺客を手分けして足止めし、どこかにあるガイアメモリの保管場所に突撃、メモリを確保したのちにそそくさと逃走、Ｔ２の場合はメモリを使用し、この工場を派手に破壊、その後逃走、といったいかにもシンプルなもの。
しかし、人間離れした力を持っている彼らにとっては、小細工ばかりの作戦は返って分が悪く、こうした力任せなものの方がその能力を思う存分に発揮できる。
だが、ＮＥＶＥＲという存在は、一定時間、細胞意地酵素を供給しないとたちまち消滅してしまう存在、そのためそのタイムリミットまでに遂行する必要があるのだ。
限界はそれぞれが準備してきた予備の酵素の量を考え、朝の７時ま

でが限度、それが任務のリミットであり、NEVERの集合時間でもある。

「さぁ、死神のパーティータイムと行こうじゃないか！」

その言葉が伝えるは、これから始まる縦横無尽に人が飛び交う戦いの合図、自らを死神と罵り、死人だと笑いながら述べる者達の異世界での初仕事、名を刻むための記念日。

それを高らかに宣言する克己、その彼の指は、天に眩しく輝く、地球では見慣れない２つの月を示していた。

Count The Story's 2　Mの影／8人のNEVER　#2

魔法を使うマスカレイド、結構強い・・・と思いたい。
劇場版ではスカルにフルぼっこされたから活躍が見れて光栄です・・・結局フルぼっこですけど。

克己からパーティータイムが宣言さえ、どれほど時間が経過したであろうか。
NEVERの砦として、この工場地下部に、霧彦とマツが走り回っていた。
他のメンバーはどうしたのか、という疑問が浮上するであろう、だが決して、他のメンバーが倒されたわけではない。
そもそもこのガイアメモ工場に突入したのは今より約30分前、見た目以上の広大さに手を焼いていた彼らに、予想通りマスカレイド・ドーパント、財団からの刺客が多数やってきた。
最初の群を担当し、足止めを始めたのはレイカ、京水、堂本、その中堂本と京水が妙なハイテンションでドーパントを相手にし、その場は辛くもその3人以外は脱することができた。
だがしばらく奥部に行き、地下部への入り口を発見し早速とばかりに突入しようとしたタイミングで、マスカレイドの第2群が襲来、先ほどより数は少ないため、2人で十分だ、と克己は芦原とその群へと突撃し、残りの荘吉、霧彦、マツが2人を残し地下部へと侵入に成功。
その後は敵の気配なく、ずんずんと進めていたのだが、ここにきて道が明確に2つへと別れた2又通路にさしかかったのだ。
一瞬判断に迷った霧彦であるが、荘吉とマツはいたって冷静、ここは片方をスカルに変身できる荘吉に任せてもう片方を2人で行くべきだ、と合致しら意見を述べた、まさに息があった2人。
その後は荘吉を別れ、こうしてマツと霧彦が奥部へとどんどん進んで言っている現状、おそらく他のメンバーはまだ倒れてはいないだろう、と希望的観測を立てる、だが実際にあの大群をやりしのぐだけの実力は全員にあるのが真実だ。

その歩みを止めない2人の前に、とある自動ドアが立ちはだかった。今までに違う雰囲気と作り、それになにかの確信めいた判断を持つ2人の足は、そのドアへとゆっくりと歩み寄り、ドアの先へと進む。そして2人の視線に飛び込んだのは、銀色の無骨なアタッシュケース、広い空間にたたずんでいる様は違和感しかなく、それと同時に2人は一層とした予感が渦巻いている。
そして早速として2人はそのケースを開けると・・・その中には、USBメモリ型を象った、26本のガイアメモリがあった、それも、ビレッジから拝借したデータにあった画像と同じもの・・・詰まる所、幸か不幸か、T2ガイアメモリであったのだ。

「ケースがこれだけ・・・というこは、試作品ですかね？マツさん。」

「おそらくね。と、いうことは、まだ量産はされていない、ってことだと思うよ。道理で工場が動いていなかったってわけだ。」

マツはいつもの癖で、情報をまとめるときやしゃべりだすときのしぐさとして指を鳴らし、そんな答え合わせを軽く交わす、とにかくこれで任務達成であろう、とかすかな安心感を抱いていた刹那、自動ドアが不意と開かれ、それとコンマ何秒かの動作、2人の目の前にあったアタッシュケースに、一本の太く、白い糸のようなものが張りついた。
それに反応し、動いたのはマツと霧彦の同時、おそらく奪取されると恐れた2人はケースに手を伸ばそうとするが、それに呼応し、その糸は力強くケースを引きよせ、2人の手にはとっさに掴まれたガイアメモリが一本ずつしかなかった。
ケースを奪取した犯人はそこにいる、と2人はドアの方向に視線を動かす・・・そしてそれは、マツにとっては忌々しい異形の姿であった。

頭部は6本足の虫が象られており、左腕は文字通り禍々しい異形の者、それは、かつてマツがその力に飲み込まれ、町を泣かせたときの姿・・・蜘蛛の記憶を駆使するもの、スパイダー・ドーパントであったのだ。

「まったく・・・ただのコソ泥がここまで来るのはいいが、試作品を持ってかれちゃあ困るんだよ。」

「こんな迷惑なもの、むしろ持って行った方が平和なのでは？時代遅れのドーパントさん。」

「ほぉ・・・ガイアメモリについて詳しいようだな。だが、俺はれっきとしたT2のスパイダー・ドーパントだ！」

と、威勢のいい啖呵代わりに名乗ったスパイダー・ドーパントは、腕から10匹前後の小さな蜘蛛を放つ。
それにいち早く反応したのはマツ、急いでその場から離れ、衝撃に備え強く身構える、それに反応した霧彦も同じように身構える、そしてその刹那に、その蜘蛛たちは、威力は小さいながらも、爆風をしっかり発し爆ぜたのだ。
マツはこれを使用したものとして、蜘蛛が出た瞬間に察することができた、だが旧型の蜘蛛爆弾はとある条件を達したことによって爆発するもの、しかももう少し威力は高いはずだとマツは違和感を感じるが、先ほどのドーパントの一言にからとある推測を打ち立てた。
T2・・・つまり旧型とは違う新型のもの、つまりいくらでも改良は可能であるのだ、おそらく条件なしの万能なものとした引き換えに、威力低下は歪めなかったのであろう。
普通の人間であるならばとても危険な爆発であったが、NEVERとして耐久力に優れた2人には慣れたものだ、至って無傷な様子な2人にスパイダー・ドーパントは笑いながら感嘆の声を上げる。

だが・・・その余裕そうな声をよそに、明らかに殺気を荒げている男・・・マツがいた。
かつての罪深き自分の姿・・・それとよくも悪くも重なってしまい、町を泣かせようとする者達に加担する目の前のドーパントに、なにより・・・かつての罪深い自分、町を泣かせてしまった自分に、とてつもない憎悪と怨恨が募っていく。
そして、マツと霧彦が不意と手の中にある一本の、先ほど咄嗟に掴んだガイアメモリを覗く。
それと同時に、2人の顔は驚愕なものへと変化したのだ。
だが2人は思い出す、T2ガイアメモリの大きな特徴、それは「メモリ自体が人を選ぶこと」・・・そして2人は、その記述に、この瞬間大きく実感を抱かれたのだ。
一方は「まるで断罪の証だな」と皮肉めいたことを言い、もう一方はそれとの再会に内心喜びを示していた。

「・・・おい、蜘蛛のいけすかないドーパントさんよ。悪いことは言わない。ここは、おとなしく逃げることをお勧めするぜ。」

「ふん！いまさら意気がろうなど・・・。」

「それはこっちのセリフですよ。先ほどの爆発を見るに、あなたは完全にメモリの力を使えていない。その証拠に、私達は怪我ひとつしていない。」

殺気立てながら睨むマツ、にこやかに、あくまで自分らしく言論で攻め立てる霧彦、それに反論ができない挙句、マツの強すぎる殺気に押され気味であるスパイダー・ドーパント、この時点で、スパイダーの優勢の影を無くしていった。
それの証拠に、自身は気づいていないだろうが、スパイダーの足がゆっくりと後ろへと移動しているのが見える。

そして・・・2人はためらいもなくその決意を表すかのように、メモリのスイッチを押した。

「それに・・・俺の前で、その姿を見せたときから、お前が倒されることは決定事項だ！」

【SKULL（スカル）】

「臆病者は、黙って指を加えていなさい。メモリの本当の力を見せて上げましょう！」

【NAZCA（ナスカ）】

「お、お前達！まさかメモリを・・・いや！T2ガイアメモリは適性のないものが使えば精神が飲み込まれ、そこらじゅうを暴れるだけだ！お前らなどに・・・。」

しかし、それはスパイダーの強がり、2人は返って不気味な笑顔すら浮かばせる。

「こいつと合ってない？そんなわけはないな。これは相棒とペアルックだぞ？」

「久しぶりに再会した相棒に、仲違いなど・・・。」

その笑みにもはや恐怖しか感じれなくなってしまったスパイダーは、今にも逃げ出しそうな腰付きでいる。
だが、この状況でならそんな反応も納得できてしまうのだ。
その笑みは・・・まさに地獄からの使者、死人としか思えないもの。
そして2人は・・・同じ「町」を愛し、「町」を守る者たちをそれ

ぞれ思い出し、一方はその無事を願い、もう一方は最初で最後に共闘したそのハーフボイルドとの最後の会話を思い出し、２人はその受け継がれし言霊を信じながら、大きく叫んだ。

『変身！』

それは、「町」を愛し、なお戦う戦士をリスペクトしたもの、それぞれの背中に思いをはせながら、言霊を響かせ、スカルメモリは左の首筋、ナスカメモリは右首にへと吸収された。
その蒼いボディと、仮面の剣士を思わせるルックス、背中にある２本のマフラーは、思いをはせた仮面の戦士を彷彿とさせるもの、高速の剣士、ナスカ・ドーパント。
その顔まさに骸のもの、両肩にはそれぞれ１つずつ骸を背負い、体全体は人の亡骸そのままの造形、そして相棒とのペアルックでもあるその姿、首には白いマフラーを一本締めている、骸の断罪者、スカル・ドーパント。
ここに、罪を背負い戦う本達２人が、戦いの力を得て現出した。

『さぁ、お前の罪を数えろ！・・・だったかな？』

「くっクソ！ここは一旦退く！」

さすがに負け試合はごめんだ、とスパイダーは天井に糸を張りつかせ、その場から脱兎のごとく逃げようとする、がそのあがきももはやみすぼらしいもの。
逃げることど言語道断、とナスカはナスカウィングと呼ばれる地上絵を模した翼で高速飛翔、すぐさまそのしなやかな剣により糸を断ち切り、スパイダーは無残に地に落ちる。
糸を無くしたクモなどもはや踏みつぶされる運命、その刹那スカル・ドーパントが思いっきり力を込めた拳をスパイダーに叩き込む。

スカルメモリの特性は「身体能力の極限までの向上」、武器も何も持たないそれに与えられたのは、極限までの力、NEVERとしてただでさえ身体能力が優れている彼の限界を超える力となれば、それは多大なる「強さ」となる。
次々と叩き込まれる蹴りや拳、それをまともに受けているスパイダーの体に、着実にそれも確実にダメージは積み重なっていく。
このままでは大敗を期す、と危機感を抱いたスパイダーは、両手からめいっぱいの蜘蛛型爆弾を放つ、が、それは目にもとまらぬ速さで翔けている青の閃光によってすべて斬撃によって無力化されていく。
閃光の正体はナスカ・ドーパント、ナスカの力はその飛翔能力と高速移動、生前の霧彦はその力を、やっと高速移動の初歩であるレベル2までしか引き出せなかったのだが、今の霧彦には強靭な肉体がある、そのため生前を軽く超越する高速移動が可能となったのだ。
まさにその様は圧倒的、その強さはスパイダーの戦意を完全にそぐことには十分すぎた。
方向を変えた青の閃光は、すぐさま無数の斬をスパイダーに刻んでいき、その斬が止まった刹那、スカル・ドーパントの胸が大きく開き、エネルギー体の骸骨を生成する、そう、それは生前に受けた仮面ライダースカルの必殺技と似通っているもの・・・その骸骨を拳に纏わせ、さらなるパワーチャージを行う。
そして、マツの大きな叫びとともに、その拳、その骸骨はスパイダー・ドーパントへと直撃するのだ。
その強い威力によって、スパイダーは完全に活動を停止、体は地面に伏し、体からガイアメモリが排出される、そしてマツは、しっかりとそのメモリをキャッチした。
メモリブレイクはT2のためされない、が、排出されたのちに物理的な方法で壊すなら別だ、スカル・ドーパントはその醜い黒歴史と決別するために、そのメモリを握りつぶし、粉砕した。
戦いはひと悶着し、安堵に包まれる・・・かと思われていたのだが、

霧彦が焦った様子でマツに迫った。

「マツさん！アタッシュケースがないです！」

「・・・しまった、ドンパチにまぎれて回収されたか。・・・しょうがない、とにかく、今は苦戦してるはずのみんなを助けにいくぞ。」

「もちろん。」

このままではタイムリミットを越えてしまう、と危惧したマツは、おそらくまだ苦戦を強いられているメンバーを考慮し、急いででの救援を考える。

しかし地下部の奥深くとなるとかなりの距離があり、なにか最短ルートはないものかとマツが考えていると、霧彦がそれに提唱した、ならば自分の飛行能力により2人で天井を貫けばいい、と。

それにマツは指を鳴らし「ナイスアイデア！」と一言、それに「光栄です」と霧彦、マツの声は、どこか振りきれたようなすがすがしい声であった。

その後、多数のマスカレイドに奮戦していた克己、芦原組にはスカルが、京水、レイカ、堂本組へと向かった。

スカル・ドーパントであるマツは、その身体能力で圧倒的にマスカレイドへと力を示しつつ掃討、一瞬敵意を向けられた克己へと制止をかけ、目の前で変身を解き弁解、すぐさま克己は戦闘態勢を解いた。

それと同時にせっかく見つけたT2を取り逃がしたことを報告するマツであったが、叱咤されることはなく、克己は笑いながら「おそらくまだ工場内にある」と予想した。

一方ナスカ・ドーパントである霧彦は、自慢の高速移動によりあっという間に3人の元へと到着、すぐさま高速の斬撃によって、一瞬にして多数のマスカレイドを退けた。
変身を解いた瞬間に京水に「颯爽と現れる白馬の王子様・・・ターニングポイントよ！」などの多大なラブコールを異常なテンションで受け、堂本が「うるさい！」と一喝、レイカは「これだから場知らずなおじさんは・・・。」と一蹴、禁句を言われた京水が激昂、といったにぎやかな様子であったが・・・。
さらにその後、克己組と同時に荘吉も合流、荘吉はこの工場の中央コントロール室に到着したらしく、その機材と一通りの機械類を破壊したため、ここはただの箱となったらしい。

こうしてすぐさまに8人は合流し、これからの行動を模索していたその矢先に、工場敷地内から、なにかの騒がしいモーターの駆動音が聞こえることに気付いた8人、そしてマツは勘付いた、「おそらく、回収したT2を運ぶ気だ」と。
それにうなずいた一同はすぐさま音に導かれながら、さきほどヘリが飛び立った敷地へと到着したのだが、あくまでヘリが飛び立った後、ヘリの姿はもう町の空にあり、任務は失敗、かと思われた。
しかし、彼らは地獄からの使者、執念深さは折り紙つきである。

「私が追います！」

【NAZCA】

すぐさまナスカ・ドーパントへと変身した霧彦は、背中にナスカウィングを展開、これまた高速飛翔によってヘリへと一瞬で接近、ドアを斬撃で切り裂き、アタッシュケースを剣先を突きつけ要求する。
それにのうのうと従うわけにはいかない、だが、ドーパント相手に

生身の人間が太刀打ちできないのも事実、この状況で取るべき行動を考えた財団の運び屋は、手元にあるスイッチをまさぐり、すぐさまプッシュした。
それはヘリの爆破スイッチ、自爆した運び屋2人は空中で爆散、それと同時にケースの中にあった24本のガイアメモリは、ヘリの下にたたずんでいる街、ミッドチルダのクラナガンへと散らばってしまったのだ。
霧彦が咄嗟に掴めたのは、「C」の文字が示されてある緑のメモリ、サイクロンメモリと、「U」の文字が示された、ユニコーンメモリのみ。
落ちたメモリの詳しい場所など把握できるわけもなく、一旦霧彦がメンバーの元へと帰還し、それをしぶしぶ克己へと報告する。
もし、データベースの記述が正しければ、メモリは人から人へと吸収され、街はドーパントまみれになることだろう。
それを考えた克己は、メンバーにこう述べた、否、これからやるべきことを示した。

「これから準備を整えた後、メモリが多数落ちたと思われる街、クラナガンへ突入。メモリの捜索及び発見、ドーパントの掃討によるメモリの回収を行う。」

力を求めるための捜索、そもそも、克己が回収を望んでいた「E」のメモリがない以上、克己もあきらめはしないだろう。
ドーパントを相手とするならば、自然と相手ができる荘吉、マツ、霧彦が中心となるだろう。
これから始まるハードワークに、3人は静かにため息を吐いていた。
回収できたT2ガイアメモリは4本・・・C、N、S、Uのメモリ、ここに、不死身の集団NEVERの8人が始動する。

夜は開け、現在は現地時刻AM7：00過ぎ、一日のさわやかな訪

れのはずなのだが、クラナガンに平穏は訪れないようだ。
なぜならば・・・まだ、「死神のパーティータイム」は、終わりを告げていないのだから。

Next Coming OOO!! Can you be HERO?

Count The Story's 2 Mの影／8人のNEVER #2

終わりました、NEVER編。

ナスカが相変わらずかっこいいようで安心です、フィギュアのほうは出来よかったしね。

マツはスカルでした、ある意味皮肉です、はい。

エターナル変身はまだ先、ほら、Vシネマの時も焦らされたから。

次回、またあらたなる来訪者が・・・！

ヒント：また悪役だよ！自分的には上位に食い込むかっこよさ。

Count The Storys 3 降臨秘話 ＃1（前書き）

はたまたライダー参入回。

また悪役、なぜまともな面子がでないかしどろもどろしている皆様・・・だが私は謝らない。

メタルフールゥコォォォーーーート！！

タイトルは参入者作品のもじり・・・この時点でばれるのかな？

ミッドチルダ現地時刻は朝の7時少し前・・・やっと人々が一日の行動の始まりである時間帯であろうか、クラナガンの住宅地にたたずんでいる一般的な一軒家、大きくもなく、かといってボロ臭くもなければ真新しくもないそれ、しばらく使用されずに半ば放置されてたそれに、3日前から2人の男性と5人の異形が住んでいる・・・正体はもちろん地球からの調査員、火野映司、伊達明、そしてグリード一行だ。
その秘密基地（セーフハウス）の中を覗くと・・・伊達が下着だけの姿で豪快な寝像を見せている最中、まだ夜明けからそこまで経過していなく、人の姿がない景色を、1人の青年、火野映司が不意と見る。
そしてすぐに視線を外した後、火野は再び台所へ向かう・・・のだが、どうも火野の様子に違和感を抱かざる負えないのが今。
違和感の正体・・・それは、火野の何気ない素振りが、どうも女性・・・それも艶やかさを感じさせる女性っぽいのだ。
かといって、火野がそういった方向に目覚めたわけでもなければ、舞台俳優に転向したわけでもない、ふと見ると火野の瞳が、日本人には異質な水色をしていることによく見れば気づける。
今の状態は、火野が台所で料理をしているのではなく、正確には火野に憑依しているグリードの1人、紅一点のメズールが料理をしているのだ。

事を経て火野の体に居候することとなったグリード一行、だが彼らは人の五感を感じることで人並みの感情を手に入れ、しだいに「退屈」という感情が一層と強く感じるようになったのだ。
そこで火野が考えた解決策、詰まる所の暇つぶしの方法、それはそれぞれ日ごとにローテーションで、この時間帯、早朝の6時から9時までの時間帯に各々の自由行動をとってもらう、というもの。

その提案によって、こうしてメズールが当番の今日、おもむろに今自分のマイブームである地球の様々な国の名物料理の調理へと取り組んでいるのだ。
基本は地球から持参したレシピ本を参考にしているが、たまに火野からも意見をもらうこともある、それは火野が外国の色々な国をまわってきて、なおかつ名物料理に触れあってきた経験の多さからの先生役、今日は火野映司監修の本格的な海鮮リゾットを調理中である。

「なんだかいい匂いすんなぁ・・・ふぁ。」

「あら、おはようございます、伊達さん。」

「今日はメズールさんか・・・てか、その姿でその声はどうも違和感が・・・。」

姿と動作と声の違和感に、もはや苦笑するしかない伊達、それに苦笑で返す精神の奥深くにいる火野と調味料の量を見極めているメズール、その会話を終え、伊達が洗面台に行った後、不意と奥深くで考え事をしていたカザリが、メズールと火野に声をかけた。

「映司、映司は今まで調べてきたことをまとめて、どう思う？」

なぜこのような質問をするか・・・それは、火野一行のこの３日間の行動と関係する。
火野一行は、グリード達との邂逅の後、この世界についての常識、最近まで起きた出来事について様々な場所におもむいて調べていた。
そして浮き彫りとなる「管理局」というワード、そして「Ｊ・Ｓ事件」・・・そして映司が一番引っ掛かったワード・・・「ロストロギア」。

なぜロストロギア・・・古代の遺失物という存在に引っ掛かりを感じたのか・・・それは火野の中にある存在・・・「コアメダル」の存在についてだ。

コアメダル・・・８００年前の王が、欲望から作りだした無限の可能性を秘めたるもの・・・存在、そしてロストロギアの基準・・・失われた世界の行きすぎた、危険性のある科学の産物という記述・・・これと照らし合わせた時、火野は一つの推測を立てた、それは・・・「コアメダルとは、ロストロギアと似たようなものなのではないか」ということ。

同じ今は亡き技術により作られ、なおかつ危険性を孕むもの・・・もしそういった見解が管理局がなせば、もしかすると自分の存在が危ないのではないか、という不安点が急に浮上したのだ。

自分は油断すれば「無」を運ぶグリードとなる危険がある、居候のグリード一行は五感を感じつづけてすっかり毒気が無くなり丸くなっている、が、正直自分がグリードとなった場合、はたして正気を保てるかが分からない、最低でも詳しいことがばれた時は、管理局の色々なお世話となるだろう。

その場合、居候しているグリード達はどうなるか・・・危険性のあるロストロギアと同等な存在、と判断され管理局に文字通り「管理」されるのが落ち度であろうと予測できる。

だがそれはあまりにも可哀そうだ、と映司は失礼ながらも述べたい、そんな実情を知ったからこそ、映司の今ある、だが体を張って解放したグリード達が、もしまたなにかに「拘束」されるのだとしたら・・・あまりにも救いようがないのではないか、と映司は思う。

わば「永遠の飢餓に苦しむ存在」だ。

グリードというのは決して満たされない欲望を満たそうとする、謂

だからこそ・・・

「とにかく、管理局に見つからないようにした方がいいと思う。じゃ

ないと、カザリ君たちが危ないからね。」

映司が案じているのは自分の心配ではない、あくまでグリード達の今後を考えてのこと。
その返答にまったくの予想通りだったのか、カザリはため息を一つ、そしてメズールもそれに同調して、料理後の後始末に腕を動かしながら映司に一言。

「まったく・・・私達の心配も結構だけど、少しは自分の心配でもしたら？私達はせいぜい見つかり次第また封印で済むでしょうけど・・・あなたの場合命すら危ないのよ？」

「やめとけメズール。こいつには何言っても無駄だ。・・・ともかく、その管理局とやらには、俺たちの存在がばれないようにすればいいんだろ？」

「アンクの言うとおりだ。とにかく、管理局の手が伸びる前に例のバッタヤミー達とコンタクトをとればいい。その後については接触した後に考えれば・・・お、メズール、リゾット炊けてるぞ。」

「あら、結構炊けるのが早いのね。ありがとう、ウヴァ。」

「俺は一番グリードの中で視野が広いからな。」

「リゾット、うまそう。はやくたべたい。」

メズール達の言葉に、内心感謝いっぱいの映司だが、こういったグリード達の様子を見ていると、改めてその思いは強くなるのだ。
グリード・・・確かに、肉も内臓もなく、あるのはメダルだけの人間とは違う存在、だがこうして個々の感情や個性を持ち、人間以上

に人間臭いような面、なにより平和を愛しているところを見ていると、やはりグリードも一種の「生物」であるとしか思えない。
だからこそ映司は一層と思う・・・グリード達も、守りたい・・・
そんな、無条件の救済の思いが。
映司がグリード達の心配とは反比例に決意を固める・・・その刹那、メズールがリゾットを皿に盛ろうろしたその最中であった。

「おいメズール！頭伏せろ！」

突然アンクからの警告、そしてメズールが言うとおりに頭を下げたコンマ一秒に・・・空気の換気のため、と開けていた台所の窓、正確には空から突如・・・黒っぽい「なにか」がすごい速度で落ちてきたのだ。
映司の頭の上の空を切り、それは台所の床に着地、堅いものが何かにぶつかった音を立て、それは映司の前に現れた。
メズールはすぐさま映司と体を交代し、映司はその物体に近づく。
そしてそれはかすかに見慣れたもの・・・黒と紫の中間色の長方形状の小さなもの・・・俗に言う地球の「USBメモリ」と似たようなものであった。

「USBメモリっぽいけど・・・なんだろう、この文字ミッド文字じゃなくて・・・アルファベットのJかな？」

映司は実物を手に取り、おもむろにそれをすみずみまで確認する。
USBメモリらしきその物体は、アルファベットの「J」の文字があしらわれており、端子も付いている。
しかしなぜこんなものが空から落ちてきたのか、そもそもなぜアルファベット文化もなく、さらにはUSBメモリの存在もないこの世界でこれが存在するのか、正直戸惑いしかない。
・・・が、その疑念を払しょくするような大きな悲鳴が、外から聞

こえてきたのはその最中であった。

その悲鳴が住宅地方面から聞こえると分かった映司の行動はもちろんのごとく早かった。

住宅地、逃げ惑う人々とは逆方向へと全力疾走で向かう映司、そしてその光景が見えた時、映司は戦慄した。

なにかの球体らしき物体、球体と言っても完全なものではなく、なぜか鉄球が付属している腕らしきものを振り回している球体らしきものが、各々のまわりの家を壊しつくしているのだ。

轟音が鳴り響き、球体は縦横無尽に、文字通り飛び回る。

が、１人だけその光景に驚いて立っている映司に意識が向いたのか、球体は映司の目の前で活動得を停止、その姿、本来の姿を現出させた。

その様、まさにふてぶてしいとしか言いようがなく、左腕にはごつい鉄球、筋肉質な人型をかろうじて模した体からは、まさに「暴力」の体現ともいうべき異形であった。

映司が驚いたのはその姿と力でもあるが、他の要素として「相手がヤミーやグリードではない」ということ。

映司が知っている異形といえば、ヤミーやグリードといったメダル由来のもの、だからこそ半グリードの映司が感じることができるのだが、目の前にいる異形からはメダルの気配を感じない、つまりヤミーやグリードではない、ということがわかってしまう。

突如現れた謎の異形、だが映司はやるべきことをもう決めている。

このまま放置していたら怪我人・・・最悪死人が出るのは明白、だとすれば今までやってきたこと、害をなすヤミーは・・・無情ながらも倒すしかない。

映司は右腕を異形のもの、正確にはアンクのものへと変質させ、目の前に自分の体と同じサイズの火球を作り出す、その生成速度はさ

すがと言うべき早さで、映司は謎の異形に向け標準を向ける。
そしてためらいはなく、映司は火球を異形へと放った・・・が、異形に直撃したままではいい、その炎と爆煙が晴れ、異形の姿を確認しようとした映司の顔が不意に戦慄した。
煙が晴れた先には・・・少々のダメージに苦しみながらも、まだやれるといった様子の異形の姿があったからだ。
それを見た映司の判断はさらに早く、今度は左腕をウヴァのものへと変化させ、すぐさま異形に電撃を放つ。
飛び散る火花、だがその火花はあくまで見かけ倒しで、まだ直撃を受けても余裕そうな異形の様子がそこにあった。
その後は火球と雷撃の繰り返し、試しに紫のメダルの力による氷球も試した、が一行に倒される様子はない、その様子に少々の焦りを覚えたのは映司、高威力を誇るアンクの火球とウヴァの雷撃、だがそれを受けようともまだ余裕でいる異形の様子に、映司は恐怖ではなく、あくまで焦りを抱いていた。
自分の攻撃手段は十分に使った、がそれで対抗策が見つかりそうにない、そう「今の映司」であったらだ。
映司は懐をまさぐり、すぐさま長方形のなにかを取り出す、が、それに映司以上の焦りを見せたのはアンクであった。

「おい映司！オーズはやめろ！お前が一番分かってるだろう、オーズの変身はまずいって！」

「そんなことは分かってる！けど、あの堅さだったらスキャニングチャージじゃないと・・・。」

「今のお前には空き容量がないだろ！このまま俺の力でけりを付けるんだ！」

「けれど・・・！」

映司はとにかくはやく決着をつけたい気持ちをアンクも理解している、このまま時間を浪費しているだけであったら、被害は増大の一途をたどるだけであるからだ。
焦る映司、制止するアンク、破壊しつくす異形・・・このまま破壊の一途をたどるだけか、と思われたその中・・・その「影」は現れた。

異形が鉄球を振り回し、それがまた新たな建物に向けられようとしたその最中・・・不意と、黒炎、どす黒い火球が、異形の体に直撃、その威力はアンクの火球とは一線引く高さで、異形は重々しい様子で吹き飛ばされる。
そして続けざまにどこからか放たれる黒炎の火球、それはさらに異形のまわりや体にぶつかり、轟音を鳴り響かせる。
そしてどこからかわからないような場所から聞こえる、猛々しいなにかの生物の「咆哮」を聞いた映司はその方向に向かって視線を移すが、そこにはなにも存在しない。
だが、映司と倒れている異形の間を陣取るような形で、なにかの人影がさえぎる。
それに気づき映司が再び視線を動かすと・・・そこにいたのは、「騎士」であった。
顔面は中世の騎士を彷彿とさせる仮面、その仮面から不気味に光る赤く発行する丸い複眼、といったらいいのだろうか、そういったおもむきの丸い目が見える。
ボディには要所要所に頑丈そうな鎧を装備しており、左腕には、なにかの龍らしき生物を模したバイザーが確認できる。
その姿・・・朝焼けに輝くには相応しくないような「黒」、それも霞んで見え、禍々しいものの欠片を感じ取ることのできる不安感を感じさせる黒、まさに「黒の騎士」が目の前に現れた。

「生命力にあふれたいい餌だ・・・。狩らせてもらう。」

【STRIKE VENT（ストライクベント）】

騎士は低いトーンの男性の声を発し、腰にあるベルトを思われるものについているケースから、1枚のカードを抜きだす、そして左腕にあるバイザーをスライド、抜き出したカードを挿入し、装填。
その刹那、バイザーから響く、不信感募るくぐもった電子音声が響く。
そしてさらなる刹那、突如何もないはずの右腕に龍の顔を模したクローが現出したのだ。
それを確認した黒い騎士は、その圧倒的な走力によってすぐさま鉄球の異形に接近し、右腕を振り上げる、そしてそのクローによるパンチを、異形の顔面に繰り出した。
その威力も圧倒的、大きな打撃を受けた異形はまた後ずさりし、威力にちょっとした悶絶。
だが、異形がそのまま大人しくなるわけもなく、異形は怒りだした様子で鉄球を持つ腕を大きく振り上げ、鈍足ながらも精一杯の走力で騎士へと突撃する。
だが騎士はその行動も計算に入れていた。

【GUARD VENT（ガードベント）】

再びケースからカードを1枚取り出し、バイザーへと挿入、するとまた何もない場所から、龍の腹を模した黒い盾を左腕に出現させた。
そして鉄球が大きく振り下ろされる地点に盾を構え、その攻撃を防御、その堅さも十分なもので、かなりの威力が予想される鉄球を難なく防いでいた。
アクションの移り変わりは一瞬、騎士は暇なく迎撃を繰り出したのだ。

攻撃を防がれたことにより1、2秒静止状態を許した異形の腹に、先ほど装備したクローを接する。
そしてそのクローから黒炎の火球が放たれたのはその一瞬、つまり至近距離から強力な射撃、ゼロ距離射撃を受ける。
その攻撃に確かなそれも大きなダメージをもらってしまった異形のよろめきは一瞬ではなかった。
確かで、なおかつ大きな隙を無駄にする騎士ではない、すぐさま一定の距離を取り、ケースから1枚のカード、なにかの紋章が描かれているカードを取り出し、バイザーへ挿入する。

【FINAL（ファイナル） VENT（ベント）】

その言葉に一層とくぐもったような感触を覚える、まさにそれは「最後の必殺技」を放とうとしていた。
なにより映司が驚いたのは・・・家の割れたガラスから、突然黒い龍が現れたことである。
何もない場所から現れた、西洋の黒い龍は、騎士のまわりを一回転し、まるで主を祝福するかのような趣でいる。
そして騎士の体は、なぜか少し地面から浮き、異形の姿を、まるで銃口を向けるスナイパーのごとく視線で標準をつけ、鋭い眼光を異形へと射し続ける。
朝焼けに鎧が包まれ、異形が恐れ慄きその場から脱っそうとしたとき、その一瞬、龍が火球を吐きつけ、異形にヒット、そして映司が驚かされた、異形の足元に、先ほど被弾した黒い火球が硬化し、異形の脱走を阻めたのだ。。
矢次に空中に浮遊している騎士が、空中で一般的にいわれる「とび蹴り」の姿勢へと移行、それの意思を察した黒い龍が、騎士の背後に陣取る、映司はそれを理解した、おそらくこれで終わる、と。
そして龍は、あろうことか主であろう騎士の背中に向け、全力出力の火球を放った、だが騎士はそれに拒まず・・・

「はぁっ！！」

威勢のいい声を上げ、その炎を背中にまといつつ、火球を受けたことによってスピードと威力が加算されたとび蹴りを、しっかりと異形にヒットさせたのだ。

水平におけるとび蹴り、一直線に伸びる炎を描いたその蹴りの威力は、オーズのスキャニングチャージにも劣らず、実際に異形は今までにない悲鳴を上げ、その場に伏した。

だが映司は驚きをさらに重ねることとなる、なんと伏した異形が、次の瞬間には小太りした眼鏡の男性に変わっていたのだ。

いかにも苦しそうな男性を心配し、すぐさま近づく映司、その横でその様子には似つかわしくない様で、黒の騎士は舌打ちしていた。

「ちっ・・・ただの人間か。人間では餌にできんな。・・・おいそこの男。」

騎士が指す男はおそらく自分だろう、と予測した映司は騎士の方へと顔を上げる。

気がつくと、先ほどまでいた黒い龍は、いつのまにか消えていたことを気づかされたのもこの時。

「はやくそいつを病院に連れてけ。さすがに、ファイナルベントを生身で受けたらやばいからな・・・。」

そいつ、とは先ほどまで異形であった眼鏡の男性のことであろう、ファイナルベントは、おそらく先ほどの蹴り、確かに、見てただけでもすさまじい蹴りであることはわかる、なまじ先ほどのような戦闘経験がある映司にはよく理解できた。

映司は返事として大きくうなずき、それを確認した騎士は視線をす

ぐに移す、おそらくその場から離れるのであろう、それを察知した映司は、自然と待ったをかけていた。

「待ってください！・・・あなたは、一体？」

あきらかに異質な存在、それが一目でわかった映司は、気持ちそのままに尋ねる。
それに騎士はすぐさま振り向き、迷いなく答えたのだ。

「リュウガ・・・仮面ライダーリュウガ。」

その問いに呼応するかのように、遠くではさきほどの龍の咆哮が聞こえ、騎士はそれに返すかのようにその場を離れる。
残ったのは、異形であった男性、無残に破壊された住宅、割れたガラスや瓦礫・・・そして映司は気づく、男性のすぐそばに、長方形の小箱があることを。
それを手に取った映司、すみからすみまで視認した映司は、さらなる驚きを覚えることとなる。
それは紛れもなく、さきほど空から落ちてきたものと同じようなUSBメモリを象ったもの。
描かれていたのは「V」の文字、特徴も相違点が多い、おそらく同様なものだと理解する。
だが、やはりその正体はわからない、そもそもなぜこんな場所にあるかすらもだ。
・・・しかし映司は一つの予測を立てていた、それは・・・もしかすれば、このメモリが異形の正体なのではないか、という予測、そうすればなぜここに落ちていたのかが説明できる、そう、これはカザリのヤミーと同じような「憑依する」ものなのではないか、と。
人間に憑依し、先ほどのように暴れさせる代物・・・もしその仮説が正しければ、これはとんでもないものだ、と映司は一抹の不安を

感じていた。

不意に現れたメモリ状の物体、ヤミーではない謎の異形、そして黒い龍騎士「仮面ライダーリュウガ」と鏡から現れる黒い龍・・・。映司が目の前で起こり続けた「不可解」に戸惑いしか抱けない最中・・・気づいたであろうか、割れたガラスの中に、存在しないはずの「金色の羽根」が舞っていたことを。

その日、機動六課の面々は・・・困惑の渦中に放り込まれていた。
朝、深夜稼働のロングアーチが、突如発生した巨大エネルギー群の反応を多々キャッチ、早々とFWメンバーが集められ、エネルギー群の正体の調査へと踏み込んだ。
そのエネルギー量は、もはやレリックにも匹敵するもので、かというと管理局が把握しているロストロギアの暴走パターンのどれにも当てはまらない、魔力の類でもなく、最近把握されている例の未確認の反応でもない、まさに「謎」という言葉がお似合いのそれ。
さらに管理局に多々舞い込む、クラナガン住民からの連絡・・・それは「街で、謎の異形が暴れている」という悲鳴に近いものと、「謎の小箱」の発見報告、その拾われた小箱は管理局員の元へ渡り、収集次第機動六課へと運ばれる手はずとなっている。
その2つの情報から考えられるは、確証がない今では宣言できないが「その小箱らしきものが、エネルギー反応に関係あるのではないか」という仮説。
突如現れた異形と、見たことのない代物、その2つの未確認にはどんな関係があるのか、渦中に取り残されている機動六課の部隊長、八神はやては必死に頭を回していた。

思えば、早朝の7時ごろ、クラナガン上空でなにかが爆発した、という通報からことは始まっていたのかも知れない、その後、突如として現れ、クラナガンの街を破壊しつくしていく異形達、数は不明、だが多いということは確かで、被害の底は計り知れない。
そしてそれとは別に、例の未確認反応を確認した現在、おそらく異形から街を守るためか、それともこの騒ぎは未確認の仕業か・・・それはまだ分からない事実だが、１つ妙なことが起こった。
それは、未確認の反応は多くても２つであった今までとは違い、ま

た新たに１つ増えていたことだ。未確認３号とも言えるのか、だがそれを確認する前にこの騒ぎを鎮めなければならない。

現在クラナガンに赴いているのはＦＷメンバー４人、副隊長陣２人、そしてライトニング部隊隊長のフェイト・・・スターズ分隊隊長であるなのはも、この任務への参加を申請していたが、なのはの体の状態が万全ではないため、それは自粛してもらっているのが現状。確かになのはが参加しないのはかなり痛手、だがなのはのリンカーコアはＪ・Ｓ事件の一連の出来事により傷を負っている状態で、しばらくの多大な魔力行使は禁止されている、これ以上負担をかけてしまったら、本当に魔導師生命の終わりが来てしまう。

それは、はやてもフェイトも、何より管理局全体が望んでいない、命の危険すらはらむとなればさらにだ。

「（こんな時に、何もできない自分が・・・悔しい。）」

だが、ヴィヴィオと一緒に、任務状況を聞きに来るなのはの顔は、自責の念と悔しさで歪んでいた、ということを追記しなければならないであろう。

ここは一般的に言われるクラナガンのメインストリート、通称「ガジェット通り」である。

なぜそのような名称になってしまったか、支局簡単、Ｊ・Ｓ事件の際に一番大量にガジェット群が押し寄せてきた場所であるから、という何とも不名誉な名称。

だが管理局内ではすっかりこの呼び名が定着しており、もはや住民勢にも染みわたってしまったので、訂正する気はないのであろう。

とにかく、このメインストリート、という名前に違和感を感じるほど人気のない現在のこの場所で、３人の人影・・・正確には、異形

1人と少女2人の影が縦横無尽に動き、轟音鳴り響いている。
少女2人の正体は、青色の魔力光が光る固有魔法「ウィングロード」の上を走っている少女スバル・ナカジマと、物陰からスバルの支援をしている少女ティアアナ・ランスター、以下2人のスターズ分隊FW。
そしてウィングロードの上にいるスバルめがけて、両手から雷撃を発し、叩き落とそうとしている異形の正体こそ、とある狂人の命をかけた結果から作り出されたドーパント、天気の記憶を駆使しもの「ウェザー・ドーパント」である。

「ディバイン・・・バスタァーー！！」

その掛け声とともに、中距離から放たれる砲撃、フェイクシルエットの行使によってやっとの隙を見つけ放ったそれは、確かにウェザーに直撃したはずであった。
だが、砲撃が止んだその先にいたのは、少し砲撃にたじろぎながらも、悠然とその場に立ち、なおかつ雷撃を放射し続け、ティアナにダメージを与えようとしているウェザー・ドーパントであった。
その雷撃に対抗しようとし、すぐさまプロテクションを張ったティアナであるが、何分その攻撃に反応するまでが遅すぎたこともあり即興で作り上げ、さらには自分のポジション上防御力の徹底を行っていない自分の不得意を行ったため、脆い盾は粉砕、直撃はまぬかれたものの、その威力によって体は壁にたたきつけられようとされた。

【Active Guard】

その刹那、スバルのデバイスであるマッハキャリバーから電子音声が鳴り響き、それと同時にティアナが叩きつけられようとした寸前に、ティアナの背後に低速の爆風が発生、それがティアナの体の完

成を相殺する形となり、ティアナの無事は確保された。
心配そうにすぐにティアナに近寄るスバル、だがそれに「大丈夫」とだけティアナはいい、あくまで攻撃の続行を促す。
それに迷いながらも決意し、大きくうなずくスバル、その後もウィングロードからあくまで中距離魔法で牽制を続ける。
なぜ彼女が得意とする格闘戦を行わないか、それは相手の圧倒的力量と、相手の能力への警戒を含め出の行動だ。
彼女は戦闘機人という、人とは異質な存在、その存在故に人とは一線を越えて身体能力に優れている面がある、だが目の前にいる異形相手には全く歯が立たず先ほども逆にやりかえされてしまった。
ならば近距離からの砲撃、彼女のもう一つの戦闘スタイルならどうだろうか、とウィングロードを行使し、ゼロ距離砲撃を試そうと尽力するが、近づくたびに、突如異形のまわりは霧や雲に包まれ、視界がシャットアウトされ、その隙に攻撃をされてしまったり死角を突かれたりしてしまうのだ。
その結果、もはや近づくことすら許されないことを悟ったスバルは、威力不足が歪めないいながらも、リボルバーシュートを繰り返している。
こんな時こそ、射撃メインでなおかつよきパートナーでもあるティアナの支援が映える、その証明に、一発だけながらも砲撃のヒットにつながることができたのだから。
だが少しの時間だけでも支援を受けれなくなってしまったスバルに、異形の魔の手が忍び寄る。
ウィングロードを縦横無尽に走り回り、少なからずドーパントを翻弄していたスバル、だがそんな停滞した状況に嫌気がさしたのはドーパント側。
そしてスバルがほんの少し近距離範囲に侵入した瞬間、ドーパントの視線が少しばかり輝く。
それと同時に、ドーパントは腰にマウントされた固有武器「ウェザーマイン」を取り出し、それから電気を纏った鞭が伸び、スバルの

体にからみついたのは一瞬、その後スバルの体に強力な電気が感電し、スバルの動きをひるませる。
ドーパントの猛攻はまだ続く、その後からませた鞭によりウィングロードからスバルを引きずり降ろし、地面にスバルを叩きつける。
そのアクションが2回、3回と繰り返され、まさに私刑状態、そのむごすぎながらも、確かな攻撃は、いくら強靭な体を持っているスバル相手でも、スバルの意識を着実に刈り取っていく。
それに黙って指をくわえているティアナではない、立ち直ったティアナはスバルを解放しようとドーパントに、自分の中では一番の砲撃、ファントムブレイザーのチャージを開始、その間隙を作ることを許されるはずだが、策士であるティアナはそれに対応策を考えていた。
それは、強固なる拘束魔法であるレストリクトロックをかけること、それはなのはから教わっていた魔法の1つで、その強度と対象の固定化には光るものがある。
少しの詠唱時間をロスしていたため、しばらく手だしが行えていなかったのだが、今は準備万端、早速とばかりにドーパントに唱えようとする、が・・・。

「小癪な！」

「キャァァッ！」

それに気づいたのか、はたまた勘付いたのかは分からない、だが不穏な動きをしていたティアナに気付き、ドーパントが不意を突こうと施したのは、ティアナの頭上に雷雲を発生させること。
その能力を知らないティアナは、ドーパントの思うつぼにはまり、雷雲からの強力な雷撃を、その身そのままで受けてしまった。
地面に伏すティアナ、かろうじて意識が残っているのははたして救いか、だがしばらくは行動不能の状態へと追い詰められてしまう。

だが、ドーパントがティアナの方に一瞬だけ意識を完全に向けた時、スバルを拘束している鞭に、一筋の青の閃光が走り、スバルを解放した。
その閃光に驚きを示したのはドーパントとティアナ、なにより解放された後、その閃光に抱きかかえられたスバル。
その閃光はスバルを抱えながら、ティアナの元へと一直線に向かい、2人とドーパントの間を陣取り、その姿を現すのだ。
ナスカの記憶、ウェザー・ドーパントと同じ上級のドーパントであったもの、高速の剣士、ナスカ・ドーパントであった。

「大丈夫ですか？お譲さま方。」

「あ、その・・・ありが、とう、ございます。」

ナスカの問いかけにかろうじて意識を保ち答えたスバル、それに焦るティアナであったが、ナスカはそんなティアナにスバルのことを「任せた」と一任、いきなり現れた異形に警戒心を抱きながらも、状況を考えたティアナは小さく肯定の返事を返す。
その後ティアナは自分達の保護を専念し、球体上のバリアオーバルプロテクションと、自分は得意にしないながらもやらないよりはまし、と治療魔法を唱える。
それを見て、静かにうなずいたナスカは、ゆっくりとながらも、彼、霧彦の普段の様子からは考えられないほどの鋭いナイフのような殺気を放ち、悠然と立っているウェザーに迫る。
だがウェザーにはまったくのたじろぎはない、あるのは元の所有者と似たもの同士となったのか、一種の「好奇心」の類である。

「あなた・・・あの若さの少女を傷つけ、なんとも思わないのですか？」

「興味がない。私はこの偶然にも拾った力に酔いしれたいだけだ。邪魔をしたあいつらが悪い。」

一方的に壊しつくし、人を傷つけただけでなく、あくまで邪魔をしたものが悪い、という理不尽の塊とも言える主張に、ナスカは怒りを募らせていく。

だが、相手はメモリの力に完全におぼれた愚か者、あくまで自分はナスカを扱いし者として高貴でいよう、とナスカは深呼吸、だがナスカの怒りは、ウェザーの一言で収まるどころか増長の一途をたどるのだ。

「2人ぐらい子供が死のうと、次元世界が崩壊するわけでもなかろう。どうしてそこまで必死となる？」

「・・・何？」

「そもそも、あいつらは管理局員。あの仕事に就くものが死んだとしてもそれは当たり前。あの歳で管理局員でいるのもよくある話だし、もっと若い奴らもいる。いまさら私が殺そうが殺さまいが・・・「あなた・・・。」・・・うん？」

「今・・・あなたは私の怒りの琴線に触れた。」

ナスカの迫る一歩は、先ほどと違い確かな怒りを表し、それを具現化させ、一層とゆっくりながらも覇気を纏わせている。

「たとえどのようなものであっても、どのような身分であっても、どのような生まれであっても・・・若い者の未来を消す権利など誰にもない！」

それは霧彦の中にある、死人になろうとも強くある信念、そして一種の願い、未来の芽を摘み取ることなど誰でも許さない彼の宣言、そして心の中では、そんな行為に加担する財団Xへの強い宣戦布告でもあり、知らずとも遠因で関わっていた自分への戒めでもあった。それをバリア内から聞いていたティアナとスバル、特にスバルに関しては深く感銘を受けていた。

戦闘機人という存在であるスバル、それの成り立ちや過程を考えるならば、色々な意味で彼女は異質な存在、一般的に言われる両親とは違う視線を受けてしまうこともしばしばあるのが現実。

いう存在は最初からなく、人とは異なる体を持ってしまった存在、そんな存在だからこそ、心ない人々から畏怖されてしまったり、人とは違う視線を受けてしまうこともしばしばあるのが現実。

だが目の前にいる人物は、自分のことについては知らないはず、だが迷いなく大きな声で言ってくれている、つまり本心から思っていることを言ったまで。

だが異質な存在でも受け止めよう、と言ってくれたことに、スバルは心の中で感銘を感謝を述べていた。

そんなスバルの生い立ちを知るティアナに関しても、スバルのような異質な存在でも許容の姿勢を保ち、なおかつ正義感にあふれた言葉に、彼女なりにその言葉に対し、単純ながらも感動の一言であった。

「ふん・・・偽善者が。」

「なんとでも言うといいでしょう。ですが、消えるのは若者ではない・・・欲に飲み込まれた大人たち・・・つまりお前だ！メモリの力に囚われし者よ！」

ナスカの堂々な開戦宣言とともに、ナスカは青の閃光となり、ウェザーからはまばゆい雷光が走り回る、だがその高速移動によって、クリーンヒットしないのが現状で、少しずつでありながらも、ウェ

ザーは危機感を抱いていた。
そんなウェザーは攻撃方法を変える、それは雨上がりの虹を彷彿とさせる破壊光線、それは閃光の軌跡をたどりながら、周囲を破壊していく、だがあくまで周囲だけであり、圧倒的な高速移動によって被弾すらできない、それもそのはず、ウェザー本人がメモリの力を最大限に発揮できていないのだ。
それに対しナスカはその強靭な肉体と、なにより他に変えがたい適性を持っており、高速移動はもはや音速にすら達するのではないか、と錯覚させるほど。
明らかな力量差、それを感じ取ったウェザーは、打開策を考え・・・それは思いついてしまった。
ウェザーは突如として攻撃の手を止め、両手は・・・バリアを展開している、ティアナとスバルへと示された。
その刹那、ティアナが気づくのと同時にウェザーから虹色の破壊光線が迫る、その威力は絶大なもので生身の人間には耐えきることなど想像できない、おそらく防御力に長けないティアナのバリアでもすぐに粉砕され、クリーンヒットは歪めないであろう。
そう・・・それはあくまで「当たった時」そして「人間が」での話である。

「え・・・？」

迫る光線と2人の間を陣取るかのように現出した青の閃光、その閃光は光線の威力に耐えきれず、背面にあったビルの壁に叩きつけられる。
それが起こることとまさに一瞬、刹那の時に起こった一連の出来事にティアナとスバルは思考を必死に動かし、とにかくその閃光の行き先、自分たちをかばったはずであるナスカへと視線を向ける。
・・・が、視線を向けた瞬間、少女2人は戦慄し、後悔した。
その先にいたのは、首が９０度以上曲がり、手足がありえない方向

を向きながら、動かない様子でいる・・・人間であったのだ。
「やはり餌にかかったか。ふん、まさかこのひ弱な2人の少女のために死ぬ道を選ぶとは・・・あわれな鳥よ・・・。」

「そ・・・そん、な・・・。」

「う・・・嘘・・・うぅ！」

ティアナは強烈に押し寄せてくる吐き気に悶絶しながら、今までの状況を整理している。
まず、あの青の異形の正体は、おそらくそこで悲惨な様になっている男性であるとは理解できる、そこから予測できるは、目の前にいる憎らしい白の異形の正体も人間であること。
だが普通の人間が変身魔法で変身してもあそこまで桁違いな力を発揮できるはずがない、ということは何か特別な魔法を使ったか、はたまたレアスキルか、それともロストロギアか、主だった答えはこの3つに絞られるであろうが、正直それを考える暇などない。
目の前には、厄介者を処理し、今にもあの男性のような状態にしてやろうか、と迫ってくる異形、その歩く様は、まさに恐怖の言葉以外の何があろうか。
強いて言うならば、・・・救済の懇願でしかないであろう。

「(い、いやだ・・・助けて・・・！)」

「(私・・・まだギン姉にもお父さんにも会いたい・・・それに、あの子達だって家族になろうとしているこの時に・・・！)」
スバルの言う「あの子達」とは、J・S事件において主体となった戦闘機人の更生組のこと、少し前、更生施設へと行くこととなった

ナンバーズ達の何人かをナカジマ家で引き取ろうか、と父であるゲンヤがつぶやいていたのだ。
それに「もちろん」と肯定の意を表したのはスバルと姉であるギンガ、同じ戦闘機人という存在である自分たちとくっつくことには、大いに意義があることだと理解しており、なにより新しく家族が増えることは万々歳なのである。
だが、それを待たずにして死へと着実に近づこうとしている今に、スバルとティアナは後悔し、なおかつ救いと恐怖しか口に出せないのだ。

「それでは・・・少女達よ、あの世で鎮魂歌を歌いなさい、私の邪魔をした罪への鎮魂歌を・・・自分たちの悲鳴で！」
その言葉と同時に向けられる両手、両名は完全なる永遠の眠り・・・「死」を覚悟した。
だが・・・それに待ったをかける存在、なによりその言葉をそっくりそのままお返しするものが・・・ウェザーの存在を・・・「斬った」。

【NAZCA】

不意と響く電子音声、そしてその刹那に・・・再び、再来の青の閃光が横切った。
完全に油断し、警戒心を捨てていた、いわば勝利に酔いしれていたウェザーに、突如として青の閃光が空を切り、ウェザーのボディに斬を1本入れ込む。
さらにそれを把握される前に、さらなる斬を1本、また1本、また1本、それは無尽蔵とでも思えるほどに青の「斬」が斬りこまれていく。
その様はまさに圧巻、それを見た誰か、風都のヒーローをよく知っ

ているものの誰かならば言うであろうか、それはかつてウェザー・ドーパントへとマシンガンスパイクを打ち込んでいくアクセルトライアルを彷彿とさせるものであった、と・・・。
ウェザーは蓄積されていくダメージに、これ以上にない危機感と恐怖を覚える、だが体が動こうとするまえに、閃光がアクションを許さない。
ウェザーは自分の身が終わりへと着実に迫る恐怖にうち震えている、そう、これがスバルとティアナ両名が抱いていた恐怖であり、与えていた恐怖でもあるのだ。
そしてナスカは、最期の締めとして、ナスカブレードに青のエネルギーを込め、3回の思い切った斬撃を行う、それは「N」の字を描いていた。
己のやったことは己に帰ってくる、まさにそれで、ウェザーは・・・その身を散らそうとしていた。

「次は・・・あなたが恐怖におびえる番です。」

「き、貴様・・・!なぜ、なぜ!うぐぁぁぁーー!!」

地面に倒れるウェザー・ドーパント、そしてドーパントの体からメモリ、「W」のメモリが排出され、ドーパントの主は人間の体へと戻る。
そこに倒れていたのはやせ気味の男性、白衣を着ているところから科学者の類なのであろうか。
しかし、変身を解いた霧彦にはそんなことなど興味はない、あるのは2人の少女の心配と、この男をどうするか、正直この場で殺しても造作ないのだが、目の前に管理局員がいる場で殺せば面倒なことになるのは確実、面倒事は作りたくないのが現状であり、なおかつ、NEVERである自分の体が酵素不足、つまり「限界」を示している。

「（・・・まぁ、背骨と首、手足の複雑骨折からの再生はかなり無理をしましたし、そろそろ限界。そこの男、命拾いをしましたね。）」

すぐさまアジトに戻ろう、と決めた霧彦は、すぐさま男のそばに落ちている「W」のメモリを回収、懐にしまった後に、２人の少女に目配せをする。

幸い命に関わるような怪我でもなさそうで、一番ひどいダメージを受けていた青髪のショートカットの少女も意識を完全に覚醒させている。

オレンジ髪のツインテール少女が治療魔法を必死に続けていた成果であろうか、それとも・・・ショートカット少女の腕からはみ出している、機械的な部分のおかげであろうか、だが無理に突っ込む霧彦ではない、それが野暮であることを知っているからだ。

だが一介の１人の少女、１つの未来の異質な形を垣間見た霧彦は、それの犯人に静かな憎悪を抱きながら、体が崩壊崩壊する前に急いでアジトへと足を運ばせよう、と思った矢先、背後、２人の少女のうちの１人、ティアナから声をかけられたのは、その時であった。

「あ、その・・・まずは、助けてくれてありがとうございました。でもあなたに聞きたいことがあります。」

「・・・多分、答えないと思うけどな。」

「・・・まず、あの化け物について、なにか知っていることはありますか？正体が人間だ、ということは分かったのですが・・・。」

遠回しに返答の意思はない、と伝えた霧彦を気にせず、あくまで質問を続けるティアナ。

だが、霧彦自身、ガイアメモリについての情報がない管理局から聞かれる質問など、大抵予想できるものであった。

「・・・知ってるけど、答える義務はない。」

「・・・では、質問を変えます。あなたは、先ほど確かに・・・その・・・。」

死んでいた、という言葉が続くのは明白、確かにあんな惨状を見た後、その人間が悠然と立っている姿を見れば誰だって違和感を抱くであろう。

・・・この場合は、言葉そのままに言えばいいであろう。

「簡単な答えです。僕は死んでいます。以上です。それでは、あなたがたは一応本拠地に戻った方がいい。私の仲間たちが、あの怪物を処理してくれているはずですから。」

「え？あっ、ちょっと待ってくださ・・・！」

ティアナの制止を振り切り、霧彦はナスカ・ドーパントに変身、ナスカウィングを雄々しく開き、閃光となり空へと遠く飛び立ってしまった。

そして結果として、ティアナとスバルの心中には、ただただ、答えは出ないであろう問いが多々たたずんでいるだけであった。

突如現れた「人間が変身する怪物」、「自分は死人」だと言った不死身の男、このミッドチルダに、確実に大きな異変が生じている、とミッドの人間は気づき始める。

そしてそれは・・・「虚像」の世界においても、「イレギュラー」

は近づいていたのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9001x/

OOO Cross Story`s ～Another World`s/Cross Greeed`s～

2011年11月10日06時20分発行